あろまーら
挿絵／8000
聖光剣姫
スターティア
女幹部にふたなり調教される変身ヒロイン
試し読み版
18
未満
二次元ドリームノベルズ

聖光剣姫
スターティア
女幹部にふたなり調教される変身ヒロイン
小説 あろまーら
挿絵 8000

第１話　光燐！　正義の美少女ヒロイン、聖光剣姫スターティア！　006

第２話　恥辱の敗北！　屈辱のフタナリちんぽ皮フェラおしゃぶり奉仕！　017

第３話　汚辱の洗礼！　ラブホで強制手コキ&玉舐め、大量顔射！　035

第４話　屈辱の精通！　ふたなり美少女戦姫、初めてのおちんぽ恥射精！　053

第５話　学園の剣姫！　淫らに染まりゆく優姫の日常！　070

第６話　オブシディア、その淫靡なる日常　087

第７話　羞恥の収録！　お嬢様センズリ告白実演ショー！　094

第８話　アメと鞭！　エロ衣装で奪われる少女のオナホ童貞！　105

第９話　リアルオナホ味比べ！　優姫、絶望の快楽射精！　117

第10話　女幹部の罠！　少女を襲う悪のパイズリ乳地獄！　129

第11話　禁断の教室！　タブーを犯す白昼堂々のJKスペルマ乱舞！　143

第12話　狂い出す歯車！　聖光の剣姫と白銀の魔剣士、禁じられた契約！　154

第13話　白濁の魔剣士！　美少女転校生は淫獣優姫のフェラ玩具！　161

第14話　乳辱の淫戯！
クールなライバルと、おうちでイチャラブパイズリ特訓！　174

第15話　白銀の剣士散華！　襲い来る女幹部の極悪チンポ！　189

第16話　女怪人乱舞！　早漏チンポに叩き込まれるドスケベ快楽責め！　205

第17話　屈辱の種付け！　亡国の美剣姫、女怪人逆レイプ！　225

第18話　チンポに負けゆく理性！
淫獣ヒロイン、昼休みの教室内で恥知らずオナホセンズリ！　244

第19話　玩弄の魔剣士！
駄肉オナホに改造されゆく気高き戦乙女の肉体！　256

第20話　覚醒する淫才！
シコ猿と化したヒロイン、通学電車内センズリ天国！　278

第21話　宿命の時！　重なる体と貫くチンポ、剣姫の新たなる誓い！　292

外伝　二人の美少女戦士、正義の電車内ダブルチンポバトル！　313

登場人物紹介

Characters

星ヶ丘優姫（ほしがおかゆうき）

聖なる宝石スタージュエルに選ばれ、悪の組織シャドーマテリアルと戦う正義の変身ヒロイン。

聖光剣姫スターティア

城鐘アリア（しろがね）

シャドーマテリアル幹部にして、最強と謳われるスターティアの好敵手。

“白銀の”シルヴァリア

銀髪美女の姿をしたシャドーマテリアル幹部の一人。妖艶かつ変態でドS。

“黒曜の”オブシディア

第1話　光燐！　正義の美少女ヒロイン、聖光剣姫スターティア！

「ぶしゅるるるぅぅ……！　許さんッッ、許さんぞォォォッッッ!!　ブ・ッ・リィィィッッッ!!」

その日、私立聖碩女学院は、放課後の校舎に突如出現した〝怪人〟によってパニック状態に陥っていた。

〝怪人〟――それは異次元より襲来した悪の組織・シャドーマテリアルが送り込む侵略の尖兵だ。

組織の大幹部〝七冥塊〟たちが持つ邪宝石の放つ波動、すなわち負のエナジーによってマイナス感情を増幅された人間が変貌する存在。

彼らは身も心も、みずからの欲望にただ邁進するだけの怪物と成り果てる。

怪人が引き起こす破壊と悲劇は、新たな負のエナジーの増大を生む。そうして収集したエナジーが、彼らシャドーマテリアルの糧となるのである。

「俺をおおおッッ、馬鹿にいいいッッ!!　しやがってえええッッッ!!　このッ、クソ女どもおおおッッッ!!　ブツリィィィッッッ!!」

今回出現した怪人は、戯画化されたボディビルダーのように上半身が膨れあがり、紫色の体色と金剛力士像のような怒りの仮面を備えた半裸の巨漢だ。唯一、首元のカラーとネクタイだけが人間時と同じで、恐ろしくも滑稽な印象を与える。

ハンマーのごとき太い腕を振り回し、物理的破壊力でコンクリートの柱をやすやすと打ち砕くと、周囲から逃げ遅れた女生徒たちの悲鳴があがった。

「お前もッ、お前もッッ、お前もォォッッ!!　俺を馬鹿にしていただろうッッ、陰で貶(さげす)んでいただろうッッッ!!」

ひっ――と、転んで腰が抜けてしまった一人の女生徒が、ずんずんと床を踏み砕きながら迫ってくる怪人になすすべなく絶望の表情を向けた。

と、そこに……！

「おいやめろっ！　お前、物理の曾根崎(そねざき)先生だろ！　なんでセンセーが怪人なんかになっちまって生徒を襲うんだよ！」

後ろからコンクリの破片と共にそんな声が飛んできて、怪人がゆっくりと振り返る。

先の女生徒を助けるため勇敢にも怪人の注意を引いたのは、染めた金髪に着崩したギャル系ファッションがお嬢様校では浮いた印象を与える名物生徒、御陵涼子(みささぎりょうこ)だった。

「ちょ、ちょっと涼子ちゃん何やってんのさ、早く逃げないと！　どー見てももう話とか

通じないよ、アレは！」
柱の陰から慌てて手招きする小柄な友人、牧野（まきの）しずくの制止も聞かず、涼子は怪人と化した教師めがけて言葉を続ける。
「聞いたよ、先生が結婚詐欺にあったって話……でも、だからって世界中の女に手当たり次第復讐するだなんて、そんなのどう考えても違うだろ！　いつもの優しい先生に戻ってくれよ、なあ!?」
「う、うう……うっっ……！」
生徒の真摯な訴えに、巨大な両手のひらで怒りの面をかぶった頭を抱え、一瞬迷いを見せる怪人――だが。
「うぅぅ……うがぁぁぁぁっっっ!!　ブツリィィィィッッ!!」
再び、抑えようのない怒りの咆吼をあげると、教師怪人は涼子の両腕を片手でまとめてひっ掴み、その体を軽々と宙に持ち上げてしまった。
「りょ、涼子ちゃんっ!?」
「あ、あぐぅうっ……！」
苦痛に苦しむ涼子。と、怪人の股間部分がグニグニと不気味に蠕動（ぜんどう）し、そこからずろんっ――と30㎝はゆうにあるドス黒い肉の槍が盛り上がった。

「女ぁ……女は、許さんんっっ……!!　みんなみんな串刺しにして、物理的に犯し殺してやるぅうっ……!!　まずは貴様からだぁぁ、御陵ぃぃ……!!」

「ひっ……!?」

これから自分を襲う最悪の運命を知り、気丈な涼子の顔もさすがに恐怖に歪んだ。

遠巻きに立ちすくむしずくも、当然ながらどうすることもできない。

まさに絶望かと思われた、その時――！

「ティアセイバー……ブーメランッッ!!」

凛とした声と共に、半月状の光が回転しつつ飛来し、涼子を抱え上げている巨腕を瞬時に切り裂いて彼女を解放した。

苦悶の叫びをあげ、振り向いた教師怪人の視線の先には……！

「聖なる刃を携えて、正義の光が悪を討つ！　聖光剣姫スターティア、輝きまとってここに光燐ッ！」

銀の軽装騎士甲冑に、アイドルの舞台衣装めいたフリルと翠緑色の清楚なスカートが複合したかのような特徴的コスチューム。

風もないのになびく黄金のロングヘア、その頂で輝く宝石のはまったティアラ。やや控えめな胸を包むアーマーを、大きなリボンが彩っている。

純白シルクの長手袋が、回転して戻ってきた光の刀身をキャッチし構えた――その姿、その口上は、どこからともなく現れて怪人を撃退して去っていくという噂の美少女戦士に間違いなかった。

「あ、あれってスターティア⁉　ほ、ほんとにいたんだ……！」

「いいから早く逃げなさい！　この怪人は、あたしが倒して――ううん、浄化してみせるわ！」

こくこくと頷き、涼子が慌てて離れたのを確認すると、スターティアは廊下の床を蹴ってふわりと宙に舞い、一直線に間合いを詰めた。

「がっ……うぐぐっっ、女めぇぇぇっっ、よくも俺の腕をぉぉぉっっっ‼　ブ・ッ・リィィィッッ‼」

怒り狂った物理教師怪人が、無事な腕をがむしゃらに振り回し、床や窓ガラスを砕き散らかすものの、少女剣姫にはかすりもしない。直前で壁や天井を蹴り、反動で的確に位置を変えてすべてを見切っているのだ。

そして、大振りで隙だらけになった背中に回り込んだスターティアが、光の剣――輝光刃（きこうじん）ティアセイバーをくるくると風車のように高速回転させ始める。

「輝刃瞬閃（きじんしゅんせん）ッ！　ティアセイバー……ハリケェェェェンッッッ‼」

回転により光のドリルのような残光を形作った輝光剣を突き出し、目にも止まらぬ速度で踏み込んだスターティアと、教師怪人のシルエットが交錯した。

一瞬の静止と静寂。

ピタリと停止した光刃が、無数の粒子となって散り、一拍を置いて――どう、と怪人が床に倒れ伏す。

「や、やったっ！　す、すげえ……！」

「本物のスターティアだぁ！　あ、あとで天音（あまね）ちゃんや優姫（ゆうき）ちゃんに自慢しないとっ……！」

柱の陰で手を取り合って、驚嘆と感動の声をあげる涼子としずく。

スターティアが動かなくなった怪人に歩み寄り、両手をかざす――と、額のティアラから優しい輝きを帯びたオーロラ光が放たれ、それを浴びた怪人が気弱そうな中年教師の気絶した姿へと変わっていく。

同時に、周囲の破壊痕も時間を巻き戻したように塞がっていった。負のエナジーが浄化反転される時に発生する、余剰エネルギーのなせるわざだ。

「うわあ……本当に怪人を、元の人間に戻しちゃったよ」

「生きてるんだな先生、よかった……！　――あ、あのっ！」

すべてを終えたスターティアに、おそるおそる声をかける涼子。
「た、助けてくれてありがとう！　その……こ、これからも頑張って！　お、応援してますから！」
「ふふ、ありがとう涼子……さん。それじゃあね！」
にっこりと微笑んで、タンッと軽快に床を蹴った謎の美少女戦士は、たちまち女生徒たちの視界から消えてしまった。
「うわ～かっこよかったねぇ、いかにもスーパーヒロインって感じ……ん、涼子ちゃん？お～い？」
「名前……名前呼んでくれた……ああっ、スターティア……様♥」
「あ～、目がハートになってる。こりゃ重症だ」

＊　＊　＊

「また腕をあげたようだな、スターティア。単体の怪人程度、もはや歯牙にもかけんか……ふ、それでこそ我が好敵手」
漆黒の美しいロングヘアをなびかせ、旧校舎の屋上にたたずむ細身の人影。
銀甲冑に身を包み、顔の上半分を仮面で隠した魔剣士――〝七冥塊〟が一人、〝白銀（はくぎん）の〟シルヴァリア。

同じ組織の怪人が打ち倒されているというのに、その様子はどこか満足げであった。
教師怪人を瞬時に打ち倒した必殺剣、ティアセイバーハリケーンは、かつて彼女との死闘を経て開眼したものだ。
『どうしたスターティア……お前の聖なる剣技とやらは、その程度のものなのか。そんな体たらくでは、我らシャドーマテリアルを壊滅させるなど夢物語だぞ』
『くっ……！　言ってくれるじゃない、シルヴァリア！　あたしは必ず超えてみせるわ、あなたを！　その剣技に絶対、追い付いてみせるッ！』
七冥塊最初の刺客〝翠玉（すいぎょく）の〟ヴェリルをついに撃退し、自身の強さに慢心しつつあったスターティアの前に現れ、格の違う強さで完膚無きまでの敗北を味わわせたのがシルヴァリアだった。
その惨敗を見事糧にし、特訓により新たな奥義に開眼した聖光剣姫を素直に賞賛してみせた彼女の姿は、七冥塊たちの中にあってどこか異質な存在だった。
「だが、私は見定めなくてはならない……お前が真に、スタージュエルの力を使いこなす戦士となれるか否かを」
静かに独白する、謎多き仮面の七冥塊。
「そう、私の〝目的〟のためにも――輝きを増しつつある聖光は、我が長き雌伏の日々を

照らす輝きとなるか……それとも」
誰にも聞こえぬ言葉を、白銀の女剣士は低い声音で紡いた。
仮面の奥に、秘められた強い意志を宿して。

＊　＊　＊

「ええいっ、またしても邪魔を！　本当に忌々しい小娘だわ……っ！」
闇色の光に照らされた、シャドーマテリアル要塞。
滞空する水晶球を通して戦いの一部始終を見ていた長身美女が、ビキニ状レザーに包まれたグラマラスな褐色ボディで苛立たしげに地団駄を踏んだ。
銀髪から生える悪魔じみた角と長く尖った耳が、異世界人であることを示している。はち切れんばかりの爆乳にむっちりした腰――額にはその名の通り菱形の黒曜石がはまっており、漆黒の輝きを放っていた。
もう一人の七冥塊、〝黒曜の〟オブシディア。指揮を執る先ほどの怪人を送り込んだ張本人である。
「スターティア……！　あの小娘ときたら、いつもいつもこの私の計画を妨害しに現れて……ッ！」
映像記録の中の剣姫を睨み、妖艶な女幹部は歯がみする。以前の戦いであの必殺剣に吹

き飛ばされ、つい最近再生手術を終えたばかりの左腕が、ズキズキと屈辱にうずくようだ。
怪人を利用した負のエナジー増大計画は、今回もまた憎き神出鬼没の変身美少女剣姫によって阻まれてしまった。
かつてシャドーマテリアルが荒廃させた異次元界から失われた、伝説の宝石スタージュエル。
それは負のエナジーを対消滅させる光のエナジーの源となる、シャドーマテリアルにとってはもっとも警戒すべき存在だった。
よもやそれが、侵攻先の世界に流れ着いて新たな戦士を生み出していようとは……！
「それにしても――妙ね。今回は、ヤツの出現がいつもに比べて妙に早かった……」
いつまでも激情に流されているようでは、七冥塊は務まらない。
オブシディアの冷徹な頭脳が、少ない情報を吟味し分析する。
考えられる可能性は一つ。
「ひょっとして――スターティアの正体は、あの学院の関係者……？」
にやりと、黒いルージュの口元が酷薄に歪んだ。
「調べてみる価値は、ありそうね……ふふっ、待ってなさいスターティア。あなたの正体に、弱みに、必ず迫ってみせるわ、この〝黒曜の〟オブシディアが――そして、んんっ…

…あんっ♥」

女幹部のむっちりした下腹部を覆う黒レザーのビキニショーツから、粘液にまみれたオスの肉器官が、にゅずるるるっ……と出現した。

美少女戦士への復讐の念をたぎらせつつ改造を重ねた、醜悪なふたなりバイオペニス。

「その時はこのチンポで、みっちり汚しつくしてブザマに屈服させてやるわ……ああっ、本当に楽しみよスターティア、その瞬間が……あはははははっっ！」

＊　＊　＊

一夜明け、翌朝。

栗色のセミロングが制服によく似合う一人の可愛らしい少女が、自宅前の道路を進みながら何やらぶつぶつと呟いていた。

「『急に家から呼び出しが』……これは前回使ったよね。『怪人が暴れてる所に巻き込まれて』……余計心配させちゃうなぁ、これじゃ。いっそ『重い女の子の日が始まっちゃって』……う～ん、さすがにあんまり、かなぁ」

ああでもない、こうでもないと〝言い訳〟のリハーサルを試行錯誤している彼女の名は、星ケ丘優姫。聖碩学院に通う二年生だ。

彼女は昨日、親友の鳥羽裕美香と放課後に待ち合わせをしていた。

だが向かおうとする直前、校内に出現した怪人の存在を感知し、慌てて戦いに向かうはめになったのだ。

メールで「急用！　あとで事情話すからゴメン！」とだけ打診したものの、さて今回はどうやって言い訳したものか……。

（友達にウソをつくのは心苦しいけど、でも絶対内緒だもんね……あたしが、スターティアだってことは）

そう――彼女こそが、聖光剣姫の正体。偶然、学校帰りに見つけたスタージュエルに選ばれ、力と使命とを受け継いだ正義感いっぱいの優しい少女である。

「おはよう、優姫」

「ひゃっ⁉　お、おはよっ裕美香！」

栗色の毛先をいじりつつ首をひねっていた最中に、その当人からいきなり声をかけられて飛び上がる優姫。

隣に並んで歩く裕美香は、いつもの清楚な制服姿に包まれた穏やかな笑顔。

おとなしそうだが芯の強そうな、やや大人びた瞳。肩まで伸びたつややかな黒髪が、フレームなしの眼鏡とよく似合っている。

「あ～……その、昨日のことなんだけどさ」

「あのね、優姫」
軽く首を傾けて、裕美香が人差し指をすっと親友の唇にかざした。
すべすべして綺麗な指だなぁ……と、優姫はぼんやり考えてしまう。
「話しにくいことなら、話さなくていいよ。優姫が話したい時で――その時まで、無理に聞いたりはしないから」
「あ……」
「だから、その話はおしまい。きっと私のためを思ってくれてのことなんだろうけど……それでも優姫に嘘つかれるのは、ちょっとイヤだし」
ほんの少しだけ寂しそうに笑って、裕美香は指を引いた。
自分が抱えただならぬ事情を察して、親友は極力踏み込まずに、だが優しく温かく見守ってくれている。
優姫は反射的に、涙がこみ上げてしまいそうになった。
（ごめん、ごめんね裕美香……！）
本当のことを話せれば――自分が聖光剣姫スターティアなのだと、裕美香に告げてしまえればどんなに気が楽か。
だが、そうするわけにはいかない。

命すら危険な戦いに、大切な親友を巻き込むわけにはいかないのだ。
「わかった……いつか、ちゃんと裕美香には話すわ。話す、から」
「ん」
短く頷き、今度はにっこりと嬉しそうに笑う裕美香。
同い年とは思えないくらい落ち着いた、優姫にもっとも安心をくれるその笑顔。
（守ってみせる……裕美香を、涼子やしずく、天音たちを絶対に……！　それが、きっとあたしがスターティアとして選ばれた意味なんだ……！）
かけがえのない日常、その象徴たる友人たちに優姫はあらためてそう誓った。
「あ、ところで涼子からのメッセージ見た？　すっかりスターティアの大ファンになっちゃったみたいね、あの子ったら……ファンクラブ入るんだって息巻いてたわよ」
「あ、あはは……」
行く手のバス停に並んでいた涼子が、こちらに気付いて元気よく手を振ってくる。
この分だと、自分にとって微妙な話題を車内でたっぷり聞かされることになりそうだと、苦笑する優姫であった。

＊　＊　＊

今思えば――この頃の日常の、裕美香がいてくれた日々の、なんとかけがえのなかった

ことか。

その日より、一週間後。

スターティアこと星ヶ丘優姫は、悪辣極まる淫らな罠によって、終わりなき陵辱劇のただ中へと転がり落ちていくことになるのだ――！

第2話　恥辱の敗北！　屈辱のフタナリちんぽ皮フェラおしゃぶり奉仕！

「追い詰めたわよ、シャドーマテリアル七冥塊の一人――〝黒曜の〟オブシディア！　聖光剣姫スターティア、輝きまとってここに光燐ッ！」

よく通る凛とした声が、薄暗い廃工場の中に響き渡った。

そこに降り立ったのは、凛々しい軽装の騎士甲冑のようにも、可憐な舞台衣装のようにも見える金属と布の複合したコスチュームに身を包み、光の刀身を持つレイピアを構えた美少女剣姫。

「追い詰めた？　フフッ、とんだ勘違いね。あなたはまんまと誘い出されたのよ、ここに」

彼女と対峙するのは、扇情的なボディを露出過多のビキニレザーに包む妖艶な美女。

美しくも禍々しい印象をまとう悪の妖女、〝黒曜の〟オブシディアである。

「懲りないわね、オブシディア！　どんな悪辣な罠だろうと、この輝光剣ティアセイバーがすべて断ち斬ってみせるまでよ！」

スターティアは侵略の陣頭指揮を執るオブシディアと何度も戦い、そして幾度となく打ち破ってきた。今度もそうするまでだと、正義の瞳が燃えている。

「ふん、相変わらず威勢のいいことね。だけど、これを見てもまだ同じことが言えるかしら？」

光の刃を構え、今にも斬りかからんとするスターティアを制し、オブシディアが右手を差し伸べる――と、手の甲についた宝石状パーツから半透明の立体映像が浮かび上がった。

そこに映ったありえないものを見て、美少女戦士は驚愕に目を見開く。

「そっそんな⁉　ど、どうして裕美香がっ……⁉」

気を失い、柱に拘束されたクラスメートの姿。その周囲を、手にナイフを持ったシャドーマテリアルの下級戦闘員たちが取り囲んでいる。

オブシディアたちの組織に、自分の正体――地元のお嬢様学校に通う学生としての姿――はバレておらず、従って彼女が友人であることも知らないはず。なのに、なぜ……⁉とスターティアの動揺が加速する。

「私の情報収集能力をナメないでほしいわぁ。ふふっ、名前まで口に出して反応したということは、やはり大切な存在だったようねぇ？」

しまった――と思った時にはもう遅かった。正義のヒロインはここに、決定的な弱みを握られてしまったのだ。

「立場を理解できたかしら？　私の命令一つであなたの大切なお友達は死ぬことになるわ。

わかったら武器を捨てて跪きなさい——脅しなんかじゃないわよ、これは」
「……くっ！　ひ、卑怯者……っ！」
「ええ、そうよ。生憎、勝ち方を選んでいるほどオトナは暇じゃないの……さあ！」
ぎり、と唇を噛むスターティア。眼前にいるなら戦闘員を蹴散らし救い出すチャンスもあっただろうが、映像越しでは場所すらわからず手の出しようもない。
ティアセイバーの切っ先が震え——やがて光の刃が音もなく消失して、剣の柄がカランと廃工場の床に転がった。次いで両手をあげ、屈辱の表情で膝をつく美少女戦士。
「そうそう、なかなか聞き分けがいいじゃない。じゃあ、これからあなたをシャドーマテリアル要塞にお招きしたいのだけれど……その前に、個人的な〝用〟を足させてもらうわね」
爆乳を誇示するように揺らしながら、嗜虐的な笑みを浮かべたオブシディアがゆっくりと積年の怨敵に近付く。襲い来る暴力を予期し、歯を食いしばるスターティア……が、しかし。
「んんっ——おぁ、んぁんっ♥　待ってなさいね、すぐ出てくるから……ぁあっ♥」
「……え⁉　な、何をっ……きゃあぁっ、うっ嘘っ——⁉」
オブシディアがV字カットの股間部分に手をかざしたかと思うと、見る間にそこが内側

からムリムリと盛り上がり――ずろんっ、と異様な物体が外に露出した。
赤黒い皮に包まれゴツゴツと太い肉の幹、その表面に幾筋も走るミミズ腫れのような血管。長大に反り返った先の一回り太く膨らんだ先端部は、すっぽりと皮に覆われ、まるで小さめのゆで卵が丸ごと包まれているかのようだ――それは特大サイズの、包茎男性器だった。
「うそ、これっておちん――っ、な、なんで女のあなたにこんなモノがっ……!?」
驚きのあまり反射的に、清楚な外見に似合わぬ言葉を口にしそうになって、慌てて目をそらしながら困惑するスターティア。オブシディアは対照的に悠然とした態度で、見せつけるように太肉棒を揺らしながら解説する。
「シャドーマテリアルの生体改造技術をもってすれば簡単なことよ。私はあなたに苦渋を舐めさせられるたび、このおチンポをより大きく、太く、スケベに改造してきたわぁ――いつかこうやって、抵抗できないあなたの鼻先に突きつける日を夢みて……ね♥」
「くっ、ううっ……こ、この恥知らずの変態女幹部ッ……！」
「あんっ、もっと言ってちょうだい♥　おチンポ反応しちゃうわぁ……うふふっ、なんでわざわざ皮がたっぷり余ったホーケーおチンポにしたか、あなたにわかるかしら？」
憎悪と軽蔑の視線に睨まれ、ビクビクのたうつ巨チンポの先――巾着のようにだだ余り

になった皮に黒レザーの指を二本にゅっぷり差し入れ、くぱっと開いてみせるオブシディア。

むあぁ……♥　と、たちまちイカ臭いニオイが湯気と共に立ち上り、ひっ――とスターティアが生理的嫌悪の声を漏らす。

「そうよぉ、あなたの可愛いベロで、この中をたっぷりホジホジ♥　ぬぷぬぷ♥　屈辱舐めしゃぶり奉仕させてやるのが私の夢だったのよっ……ああんっ、こっこれからとうとうその時が来るって考えただけでカウパー漏れちゃうっ♥」

ぴゅっ♥　ぴゅぴっっ♥　と広げられた皮ホールの奥から、半透明の粘液が水鉄砲のように勢いよく発射され、慌てて顔をそむけたスターティアの肩口付近に飛び散った。

トロッとねばつくそれは、すでに普通の成人男子が放つ精液にも匹敵する粘度と臭気を備えており、未体験のおぞましさにさすがの変身美少女剣士も凛とした容貌を青ざめさせる。

「じょ、冗談じゃないわ……っ！　し、舌でそんな気持ち悪いのを……な、舐めるなんて死んでもゴメンよっ――！」

「あらあら、あなたって記憶力ないの？　私の指示一つで、大事なお友達が犯されて殺されてさらに犯されるって状況、ちゃんと覚えてる？」

「そ、それはっ……！　お、お願い、彼女にだけは手を出さないで……！」

あらためて絶望的な力関係を宣告され、血の気が引いた顔で懇願するスターティア。彼女にとって裕美香はかけがえのない親友であり、守るべき美しい日常の象徴であり――何としてでも守り抜かなければならない存在だった。そう、たとえどんな屈辱にまみれようと……！

「だったら、とるべき態度ってものがあるんじゃないかしら、聖光剣姫さん？」

「わ……わかった、わ。……やる、なんでも言う通りにやるから……だから約束して、裕美香を傷付けないって……！　家に返してあげて……！」

「だ・か・らぁ、その約束が果たされるかどうかはあなたの態度次第、でしょう？　そこを理解したら、まずは――やる、なんて無味乾燥で曖昧な表現じゃなくて、これから何を私のおチンポにしてくれるのか、ちゃあんと具体的にマゴコロこめて言ってご覧なさいな♥」

「な、なっ――!?」

「そうそう、気持ちが入ってない適当なこと言ったら、その時点でお友達の指くらい飛ぶかもしれないから。そのつもりで慎重に言葉を選んで……ね♥」

みずからの口で、屈服宣言に等しい淫らな言葉を紡げと――その残酷な余興の宣告に、

スターティアの美貌はみるみる、かぁっと朱に染まり、羞恥と絶望の涙が浮かぶ。
だが、断るという選択肢は存在しない……親友の命と尊厳がかかっているのだ。
美少女剣士は意を決し、眼前でこれ見よがしにブラブラ左右するおぞましい肉筒凶器へと視線を移し、ごくんと唾を飲み込んで……嗜虐的に笑うオブシディアを見上げ、口を開いた。
「あ……あたしに、オブシディアの皮余りほーけーおちんちんを、し……舌で、ねぶらせてください……！　か、皮の中にベロ突っ込んで、ねろねろ舐めさせて、ください……っ！」
何度もつかえながら吐き出される、少女が今まで考えたことすらない卑猥な表現の羅列。言葉にするだけで自分がコスチュームごと汚れるような錯覚に、スターティアは襲われていた。
「うふふ、思ったより上出来じゃない。一つ注文をつけるなら今度からは〝おちんちん〟じゃなくて〝チンポ〟とか〝おチンポ様〟って言ってちょうだいね♥　あなたの声で下品な言葉、できるだけ聞きたいの……まあいいわ、じゃあ――ほらぁ、は、はやくぅぅ……♥」
可憐な唇めがけて狙いをつけ、淫語でギンギンにフル勃起（ぼっき）したフタナリちんぽを仇敵（きゅうてき）に突きつけるオブシディア。興奮と期待からか、立ち上る淫臭がむわっ♥　とさっきより増

している。

スターティアは顔をしかめながら目をつぶり、精一杯突き出されたピンクの舌が、だらしなく余った皮袋の裂け目へとゆっくりゆっくり近付いて――そして、ついに触れた。

つぷっ……つぷぷぅっ♥　にゅるるんっ……♥

「おっ、おぉっ……♥　あ、あの生意気な聖光剣姫スターティアが、私の皮余りおチンポにベロ差し込んでるぅぅ……こ、これ最高にキクわぁっ♥　これだけでイケちゃいそぉぉ……♥」

（う、うううぅ……く、臭いぃぃ……うえぇ、変な味するぅぅ……！）

仁王立ちで赤黒いチンポを突き出した魔乳美女幹部に、凛と美しいバトルコスチュームのまま跪き、恥皮に舌を差し込みおずおずと内部をねぶり回す変身美少女戦士……本来あってはならない構図が、オブシディアの興奮を、スターティアの屈辱を加速させていく。

「て、手は使っちゃダメよぉ……♥　はしたなく顔ごとおチンポ追っかけて、ベロだけで中をじっくりネロネロ、ラブ愛撫しなさぁい……♥」

命令されるがまま、キスもしたことのない処女舌がムレた肉ポケットの中をくすぐる。

頭が痺れるようなえげつないエグ味を必死で我慢しつつ、フタナリチンポの敏感ゾーンにたどたどしく分け入っていく剣姫の生舌感触に、オブシディアは快感と興奮でよだれを

垂らさんばかりだ。
「おっほ♥　つ、ついに亀頭に到達したわねっ、んぉお……っ♥」
ふにゅふにゅと妙な舌触りの余り皮をかきわけた先には、ツルツルの舌触りと火傷（やけど）を錯覚しそうなほどの熱さを持つ、熱した硬いゴムのような弾力性の塊が待ち受けていた。
そこと皮の内側は、さっき肩口に飛んだ先走りを煮詰めて凝縮したような、こってりとオス臭い味に一面覆われており、舐めても舐めても苦み混じりのヌメつく嫌味が舌を襲う。
「んぷ、はぷっ……れろ、りゅろろっ……ううっ……！　ぷぁ、れりゅるりゅっ……れろぅ」
「おほっ、んほぉぉ♥　皮フェラすごいわぁぁ、こっこれ皮で♥　皮で押さえられて亀頭と舌がぴったり密着してぇぇっ……♥　見た目もエロすぎてカウパー濃くなっちゃうぅぅ♥」
外からでも、亀頭を包む皮の下に浮いたスターティアの可愛いベロの形がぷっくりと判別できる。それはおずおずと左右に、前後にネチュリュチョ動き、本来憎むべき敵の下品なフタナリ汚チンポを気持ちよくさせる禁断のお掃除運動を繰り返してしまっているのだ。
「うふふっ♥　どんな気分かしら、大嫌いな私にベロ肉奉仕するのは……あなた、この前なんか私の左腕を必殺剣でそっくり吹き飛ばしてくれたわよねぇ……再生手術が済むまで

とっても痛かったのよ？　反省の口上言いながらもっと愛情ねぶりしなさいっ、ほらほらぁっ♥」

「う、くぅっ――！　お、オブシディアに痛い思いさせて、申し訳ありませんでした……っ、お詫びにお……おチンポを真心こめてスターティアが、なっナメナメお綺麗にします……ピカピカになるまでゴシゴシ舌磨きいたしましゅ……んりゅっ、りゅろれろぉっ……！」

「はっおぉ♥　な、なかなか媚びセリフが上達したわねっ♥　それじゃあいよいよ一番奥っ、おチンポのくびれ段差の部分まで舌を思いっきりネジこんでレロりなさいっ♥　ほらっ♥」

（お、奥の段差ってこのタマゴみたいなのの後ろ側のぉ……!?　こ、こんなとこ思いっきり舌伸ばさないと届かなっ……こ、こうなったら、ううっ、こうするしかっ……！）

あーんと思いっきり形のよい口を開き、ぱっくり包茎亀頭をくわえ込むように唇をかぶせるスターティア。口腔（こうこう）に熱いペニ先を迎え入れることで、舌を最大限に皮奥まで伸ばす試みだ。

だがその姿は傍目（はため）には、唇をひょっとこのように無様に変形させて下品に太チンポをパックリ口全体でくわえ込む、凛々しい正義の少女剣姫にあるまじき媚び痴態に他ならない。

「んほっぉおお♥　なっ何してるのよスターティアっ、愛と正義の美少女戦士がしちゃいけないエロ顔になってるわよぉっ♥　お、奥までそんな顔で舌入れるなんてっ、へほぉっ♥」

「んっ、んりゅりゅぅぅ……っ、んぷ、れろりゅろろっ……♥　れっろ、れろりゅっろ♥」

親友を救うため――その一念で羞恥心をマヒさせ、悪の女幹部にすら貶まれる痴態さえも、恥をかなぐり捨て淫らな水音を立てて演じるスターティア。

淫らな努力のかいあってその舌は包茎皮地獄の奥、カリ首に繋がるエグい段差部分までついに到達し、力を込めた舌先で敏感部位をりゅろりゅろ愛撫される鋭い快楽に、さすがのオブシディアもむっちりした尻肉を揺らして品のない嬌声（きょうせい）を漏らす。

「へほぁ♥　んぉぉ……♥　いっイイわあ、そこそこそこキクぅぅっ♥　す、スターティア、それしながら私の目しっかり見てっ、あっあと両手でピースしなさいっっ♥」

「ん、んぅぅ……♥　んりゅぅぅう……？（こ、これでいいの……？）」

羞恥に上気した上目遣いの潤んだ瞳が、ぶるぶる揺れる巨乳越しにオブシディアの発情した顔を媚びるように見上げる。震える指が、弱々しいピースサインをWで形作った――その口にずっぽりと赤黒く長大な太チンポを刺し、鼻の下を伸ばして亀頭に吸い付いたままで。

女騎士のアーマーにアイドルめいたフリル布、いずれも淫らさとは無縁のはずのモチーフのコスチュームに全身を包みながらにしてのフタナリ奉仕淫行は、もはや彼女のファンの一般市民が見たら卒倒するような光景だ。しかも……んりゅうりゅっ、にゅぽぷんっ♥りゅにゅんっ♥　とはしたない包茎しゃぶり音を立て続け、鼻からすぴすぴ呼吸をしながら、である。

「おほぉ、さっ最高よあなたっっ♥　正義の戦士なんかよりピンサロがお似合いのエロ媚びメス顔だわっ♥　おぉぉんおっ♥　たったまらないわぁっ、アレが、アレがきちゃう、スターティアの美少女台無し包茎フェラ顔でっ、ミルクタンクがお外に出ちゃうわぁぁっ♥」

「……っ、んぅぅぅっっ⁉（な、何これぇぇっ⁉）」

突如、だぷんっ——♥　と黒レザーのビキニパンツから左右にハミ出るように、皮に包まれた二つの球体がオブシディアのむっちりした太ももの隣にまろび出た……それはチンポ同様のバイオ改造手術で付与された本来メスにありえない器官——巨大なキンタマだった。

「うふふっ、ココで何作ってるか分かるわよねぇ……そう精液よ、私の繁殖欲と怒りの詰まった鬼ザーメン♥　先走り汁なんかとは比べものにならない濃さ、クサさ、量、ネバっ

こさ……♥　私は恨み重なるあなたにしこたまブチ喰らわせるために、わざわざ全部を最高にエグいレベルに調整してもらったのよぉっ♥」

（さ、最悪っ、最低ぃぃっ……！　な、何考えてるのよこの変態ぃぃ……っ！）

鈴口の割れ目からヌルヌル漏れ出すカウパーすら、十分以上に量が多くどんどん湧き出てくるため、スターティアは嫌でも口内に流れ込んでくるそれを唾液と混ぜて定期的に嫌々飲み込まねばならない状態だった。それを遥かに越える暴力的な液体が、出てくるなんて……！

「おっ♥　おっおうぅっ♥　わかるわよぉ、お精子がどんどんタマん中でギュンギュン生産されてる感覚がたまらないわあぁぁ……♥　念願のあなたを前にどれだけヒリ出るか、私にもわからないわよぉぉ……ちなみにこの前あなたの映像オカズにしながら女戦闘員にしゃぶらせた時は、危うく窒息させそうになっちゃった……っ♥」

（う、嘘っ……ど、どれだけ出すつもりなのよ、そんなの出されたらあたしっ――！）

黒レザーに鈍く光る左手で、クルミでも弄ぶように自慢の巨タマ二つをグニグニ揉み弄ぶオブシディア。右手はスターティアの蜂蜜色がかった金髪を優しく撫でているのが余計に恐ろしい。

それでも愛撫奉仕を止めて許されるはずもなく、せめて一刻も早く終われとばかりに、

変身美少女戦士はがむしゃらに包皮内で舌を踊り狂わせて亀頭を責めシゴく。
「んれろっ、れろぅっ♥　れっろ、れりょ……るりょっ♥　ぬるるんっ、るりょにゅぷっ！」
「おっほぉぉっ♥　おおおぉぉっっ♥　い、いよいよキそうよっ、射精秒読み段階ぃぃっ♥　ねっねえスターティア、あなた必殺技のティアセイバーハリケーンあるでしょっ、剣ぐるぐる回すやつっ♥　あれみたいにベロでぐりゅぐりゅやって、私にトドメ刺しなさいっっ♥」
　決死の特訓で身に付けた、誇り高き得意技までもこんな形で汚される屈辱……だが、これも親友を救うためなんだ……と、スターティアはもはやすべてを驚くほど従順に受け入れてもいた。あるいはそれは、口内にハマりっぱなしの巨マラから立ち上る淫臭を呼吸のたびに吸い、それが漏らす濃厚カウパーをすすり続けたせいで起きた淫らな変質だったかもしれない。
「ひ……ひあふぇいばー、ふぁ……ふぁりへぇーんっ……♥　――れろっ、れろんっれろろんっっ♥　れろりゅろりゅるるんっっっ♥♥」
「んおっ⁉　……おっっほぉぉおっっっ♥♥　へっへぇぇぇひぃっっ♥　おぉおダメ駄目ダメこれほんと必殺ぅぅっっ♥　ちっチンポ殺されるっっ♥　とどめっトドメきたぁっ♥♥」

美少女剣姫の上品な舌が、扇風機のように下品極まる肉ビラ回転でパンパンに張り詰めた亀頭の全周囲にトドメの激烈快楽を送り込む……オブシディアの背筋がのけぞり、銀髪と肉幹が同時に波打って、獣めいた声をあげながら――ついに濃厚爆発射精の瞬間が訪れた。

「だっ♥　射精すわよっ♥　イッイクわよぉぉっ♥　グツグツ煮えたぎった怒りの怨念ザーメン、恨み重なる憎ったらしいあなたに思いっきり爆噴してやるわぁぁっっ♥　ほら媚び顔Wピースちゃんとしなさいっっ!!　おっほぉぉぉおおおおっっっおぉおっ♥♥」

「んんぷっ♥　んふぅぅ～～～～っっ♥　んっぷぅぅぅっっっッッッ!!?」

――ボびョッ♥　どぽぽびゅぽぉぉぉっっ♥

ぼびゅるるるるるっっ、どぶっどばぱぁぁっ♥　びちゅうぅぅぅっっ♥　んびっっ♥

「あぁぁぁおッ♥　あおっ♥　んおっほぉぉぉおっっ♥　おっひぃぃぃぃっっ、出る出る出りゅぅぅ～～～～っっ♥　たったまらないわぁぁぁっ、ついにクソ生意気な小娘に制裁チンポ汁ブチ喰らわせてるのよぉぉっこの私がぁっ♥　オブシディア様の完全勝利大噴射よぉぉっっ♥♥」

「はぶっ、んぼほぉぉぉっっ!?　んぶぁ♥　んひっ、んおっんぐぅぅぅほぉぉぉっ♥」

発射というより、それはもう爆発、炸裂だった。口に含んだ亀頭の割れ目から、蛇のよ

うにのたうち暴れるゲル状粘液の束が……ほぼひと繋がりになって猛烈な勢いで、びゅっくんびゅっくん撃ち出され続けるのだからたまらない。

ものすごい異臭を放つ半固形の粘塊が、スターティアの口の中に折り重なるようにしてどんどんスペースを奪い、のどちんこに勢いよく当たった何発かが反射的な嘔吐感すら誘発する。

（だ、だめへぇぇぇっ、これもう無理ぃぃぃっっ！　は、吐き出すしか――っ）

「あっは♥　ひ、一つ言い忘れてたけどっ――あ～出る出るまだ出るぅっ――ほんの一滴でもこぼしたりしたら、おっお友達の体に、ヒドいことしちゃうわよぉ……っっ♥」

「――!?　な、なぁっ……!?」

一瞬で断たれた退路。なら残された手段は一つ……これを飲み込まなければならない！

「んっ、んぐっ……んぷぅっ♥　んぷぁ、ぐぷっ……ごきゅんっ♥　ごきゅぅぅんっっ♥」

包茎余り皮を下品なストローにして、宿敵のグロちんぽから直搾り精液をちゅーちゅー吸引し続けるフタナリミルク飲み女剣士と化してしまうスターティア。律儀にもまだ両手でピースのポーズを続けているのが滑稽だ。

オブシディアも強烈すぎる射精感に今やすっかり妖艶さの仮面も剥がれ、ガニ股ポーズではしたなく自分の巨乳をぐにぐに揉み、ブラブラと巨大なキンタマを揺らし、眼前に跪

く変身美少女剣姫の口にヘコヘコと股間を叩き付けながら快楽を貪ることに余念がない。

「おほぉ♥　あぁぁぁ楽しいわぁぁぁっ♥　あのスターティアにっ、おチンポほ乳瓶から直ミルク授乳させる圧倒的勝利感っ、征服感っ達成感っっ♥　ま、まだまだ簡単には終わらないわよぉ、がっつりこってりフル稼働キンタマに気合入れてしこたま出しまくるわよぉぉっっ♥」

どっくん♥　どっぷんっ……♥　どくんっ♥　どぷぷん……っ♥

（んぶっ、んぶぅぅぅっっ♥　ど、ドロドロ濃いのがぁぁ、ノドにからんでぇぇ……っ♥）

びゅっぷん♥　びぴゅんっ♥　ごぷっ……どびょぽぉぉっっ♥

（は、鼻の内側からくっさいニオイ抜けてくるぅ……か、体の中からクサくなるぅぅっ……♥　お、オブシディアのちんぽ汁で体造り替えられりゅぅぅ……！　んぉぉ……♥）

「おっへ♥　おへぇぇ～～～っっ♥　で、出続けるぅぅぅ～～～～っっ♥　金玉ポンプのドスケベドピュり運動が止まんないぃぃっっ♥　し、幸せぇぇぇっへぇぇ～～～～っっ♥」

たっぷり一分間……あるいはもっと長い時間だろうか？

もはや、圧倒的な量と粘度とスペルマ臭の暴力、目の前で脈打ち続ける肉サオと巨タマの偉容、そして耳に口の内側から響く下品極まる射精音――味覚嗅覚触覚聴覚視覚、五感すべてを犯されているといっても過言ではない状態のスターティア。

（お、お腹のなかぁぁ、もうたぷたぷになってぇぇ……の、飲み込めなひぃぃ……！）
「ッあ♥　っほ♥　んあぁ、出た出たぁ……♥　じ、人生最高の射精だったかも……♥　ふふっ、スターティアったらそろそろ限界のようねぇ、精液で口ぱんぱん、リスみたいでみっともないお顔ぉ……♥　じゃあ一回、名残惜しいけどちんぽ抜きましょうか……♥」
ぢゅりゅりゅるぅぅっ……♥　と、ようやく射精を終えた太ちんぽが引き抜かれる。
口腔内の空気が薄くなっているため、自然とスターティアの唇は強い吸引力でなかなかチンポを離さず、びろぉーんと伸びた余り皮がひょっとこ口から伸びているという下品な絵ヅラを演出する。そして、限界まで伸びきったそれがいよいよチュポンと離れる瞬間――！
ちゅぽんっ――ぴゅぷぅっっ♥
うどん状に芯を持って半分固まりかけたザーメンヒモが、唇の隙間から飛び出しかけた。
（だ、だめぇっ……こ、これをこぼしたら裕美香が……っ！）
慌ててそれを吸い取るスターティア……ちゅるっっ♥　とそれこそ麺類のように、美少女剣姫の可憐なお口に、イカ臭い精子の詰まったフタナリ白濁ヒモがすすり込まれた。
「あはっ、上手ね♥　一滴残さずよくできました、さすが聖光剣姫スターティアだわ。ご褒美に、今口の中に残ってるぶんは一度吐き出してもいいわよ……ただし、両手の上に、

ね♥」

（ううっ、もうなんでもいい……一息つけるなら……っ！）

言いつけ通り、両手のひらをお行儀よく揃えて器を作り、そこに口を寄せるスターティア。

んっ……♥　とせつなそうな声をあげ、その桃色の唇を白く汚し、唾液に混じってもなお濃厚な白濁汚ザーメンが、むりゅむりゅぅぅっ――と吐き出されてこんもり積み重なった。

「すごいわ、我ながらたんまりとヒリ出したものねぇ……これと同じものが今あなたのお腹にたっぷり入ってて、あとで栄養に変わると思うと、なんだかドキドキしちゃうわね……♥」

「へ、変なこと言わないで……！　んぷっ、うえぇ……！　えうぅ……」

今にも溢れこぼれそうなほどの量――指の第二関節までを包むシルクめいた手袋は、すっかり精液が染みてジットリと薄汚れている。先ほどの肩口への飛沫（しぶき）とはレベルを異にする、バトルコスチュームをはっきりと汚染する卑猥な汚れだ。

だがスターティア自身はそんなことを気にする余裕もなく、ようやく侵入者が退去した口腔内に新鮮な空気を吸い込み、はぁはぁと荒い息をつくばかりだ。

（う、ううっ……は、吐く息も吸う息もぜんぶおチンポのにおいがするよぉぉ……！）

くらくらと酸欠寸前の脳を焦がす淫らな口腔粘膜セックスの余韻。今や心の中ですら、言いつけ通りに〝おチンポ〟呼びしていることに彼女は気付いてもいなかった。

そして、無意識に再び、白濁汚液の占拠する手のひらへと、上気した顔を近付け――。

「あらあら♥　命令する前から、ちゃあんと残さず飲んでくれるだなんて……♥　てっきり、それはもう捨ててもいいと勘違いしたあなたを叱る流れになると思ってたわぁ」

「え……えっ？　だ、だって飲まなきゃいけないんでしょう……？　これ……っ」

命じられるまでもなく、自分から再び残りの発射液へと処理奉仕をしようとしていた……その事実にワンテンポ遅れて思考が追い付き、かぁぁっとスターティアの頬に血が上る。

「そうよぉ、その通り♥　さあほら、私の排泄した生搾りスケベ汁を残さずゴックン、あなたの可憐なおクチで残らず精飲キメときましょうか♥」

にやつきながら半勃ちのチンポをぶらつかせ、自分があらためて残りザーメンを飲み込む所をじっと見つめるオブシディアの視線を否応なく意識しながら、彼女はまるですべてを頭から振り払おうとするかのように……喉を波打たせてソレを飲み下し始めた。

ずっ、ずずっ――ちゅずっ、ずじゅぅぅっ――♥　んずっ、んずくちゅっ――♥

「うふふ、従順で可愛いわよ、今のあなた……♥　私のふたなりザーメンミルクは美味し

いかしら？」

「ごきゅん、ごくっ……♥　ぷぁ、わ、わからないわよ……へ、変な味しかしないっ……！」

「んふっ、そのうち美味しくなるかもしれないわね……ああっ、あ、あらためて意識すると興奮するわねっ……あなたにこんなコトできちゃうなんて……これからも、まだまだ……！」

これからも……？　まだまだ――？

その言葉の意味を理解したスターティアは、血の気の引いた顔を――口の端に白濁をこびりつかせたそれを、頭上の陵辱者へと向けた。

「こ、これで終わりじゃないの……？　ま、まだ何かさせるつもりなの……っ!?」

「あらあら、何寝ぼけたこと言ってるのかしら。たった一回おクチでヌかせただけじゃない、まだ……私のコレは全然、満足も疲れもしてないわよぉ……♥」

無慈悲な言葉通り、先端から長細い残り汁を垂らしたフタナリチンポは、再びむくむくと鎌首をもたげ、太さ硬さを取り戻しつつあった。水着に似たレザーからはみ出したままの巨タマ二つも、不気味にぐにゅぐにゅと蠕動している……人間以上の速度で精子を増産中なのだ。

「ひ、ひっ――!?」

「言ったでしょう、シャドーマテリアルの生体改造技術はスゴいって♥　私の自慢のおチンポは、回復量も連射回数も人間のオスなんかとは比べものにならないんだから……♥」
濃厚な精臭を放つ極太剛直をにゅこにゅこシコシコシゴきたてながら、涙目で後ずさる獲物めがけゆっくり間合いを詰めていくオブシディアの口の端には、サディスティックな笑みが浮かんでいた。
「あなたに作戦を阻止された回数が確か全部で12回、ならあと最低11発はここでみっちり喰らわせてあげないとねぇ……♥　そのコスチュームのあらゆる部分がドッロドロのぎとぎとになって、私の遺伝子のニオイがとれなくなるまで終わらないわよぉ……♥」
「い、嫌っ、そっそんな……！　い、嫌ぁぁぁっっっっっ‼」
かくして聖光剣姫スターティアに再び迫る、〝黒曜の〟女幹部の淫虐フタナリチンポ。
だが、我々は信じている。愛と正義の美少女戦士が、必ずやその卑猥な攻撃のすべてを受け止め、いつか反撃の糸口を掴むことを――！
戦え、負けるな！　光燐せよ、聖光剣姫スターティア！

第４話　屈辱の精通！　ふたなり美少女戦姫、初めてのおちんぽ恥射精！

「んほっ、んおッほぉぉうっっ♥　こっ今度は頭からひっかけてあげるわスターティアっ、精液シャンプー浴びなさぁいっっ♥　んぁあっっ、おぉぉ出る出るぅぅっっ♥」

「っっっ‼　ぅあうッッ⁉　いっ嫌ぁぁあッ、かっ髪にっ……さ、最低、最悪ぅぅ……！」

血管がビキビキに浮いた太いフタナリ魔巨根から再び、びゅちびゅちと空中をのたくって放たれる精液は、量も濃度も臭気もまるで衰える気配を見せず、聖光剣姫の黄金の髪めがけて降りかかり、ティアラごと新たな陵辱の汚染痕を付け加えた。

すでにスターティアは、萎えることを知らない宿敵の絶倫魔チンポによる大量射精を執拗なまでに、可憐なコスチュームの至る所に計10発近くも喰らわされている。

そのふんわりした黄金色の髪をチンポシゴき道具にされ、輝くロングヘアの中にぶちまけられた精液を無理矢理塗り込められ――。

コスチュームからのぞく、無駄な毛の一つもないすべらかな脇の下でも……そして十代の肉体だけが持つハリとなめらかさを誇る、柔らかだが健康的に引き締まった白い太ももの間でも――。

いずれの処女地にもオブシディアのグロテスクなフタナリ巨根を挟まされ、コスらされ、言われるがままに精液を搾り出すみじめな肉玩具として扱われた。

今や、その騎士鎧とアイドルの舞台衣装を合成したような凛々しくも愛らしい戦姫の装束は、シルクやサテンに似た生地といい、金属質のアーマー部分といい、それらを彩るフリルといい——あらゆる部位をねっとりと濃厚な悪の汚精液で征服マーキングされ、ネバついた糸を引くヌメりと異臭に汚染しつくされているのだ。

——だが、それでも。

「ムダよ、オブシディア……！　どんなに汚されても、あなたはあたしの心を折ることはできないッ！」

それでもなお正義の聖光剣姫は、精液にまみれた顔をあげて陵辱者をキッと睨みつける。その不屈の魂は、どんなに汚されようとも気高さと闘志をいささかも失ってはいなかった。

「なるほど、ね……確かに嫌悪感や苦痛をただ与え続けても、戦いの中と同じようにあなたはそれに耐え、簡単には屈しないでしょうねぇ……」

ラブホテルのベッドに腰を下ろし、あれほど連続射精したにもかかわらずまだ萎える気配を見せないバイオ改造巨根をびくびくふるわせながら思案するオブシディア。だがその声音にもまた、敗北感や落胆は一切混じっていない——むしろそうでなくては面白くない

とばかりに、宿敵の気丈な頑張りを楽しんでいるかのようだ。

「でもねスターティア……まだまだ本格的な行為が始まってすらいないことくらい、あなたにもわかるでしょう？　あなたは本当にそれにも耐えられて？」

スターティアの細い腰を抱え上げ、座った自分のチンポの真上にそのスカートの中を……いまだ手をつけていないもっとも大切な場所を、ググッ――とゆっくり近付けていくオブシディア。

「――っ!!」

女性器の場所めがけ、迫る宿敵のペニス――いよいよ貫かれ、処女を奪われるのではないか……性知識のさほど豊富でないお嬢様でも、当然予想されうる最悪の展開。

しかしそれゆえにスターティアは、一連の陵辱劇が始まってからというもの、その運命に対する覚悟を固めていなかったわけではなかった。

「好きに……するといいわ！　でも、たとえあたしの体をあなたの醜い凶器が貫いたとしても……！　それでもあたしは、絶対に負けたりなんかしないッ！」

気丈な反抗の言葉。さすがに声は震えているものの、そこに絶望の色はない。その表情をしばらくじっと見つめていたオブシディアは、にやりと黒いルージュの唇を歪め――美少女剣姫の秘所に迫りつつあった肉の筒先をピタリと止めた。

「フフッ、確かにね。今、あなたの処女を無理矢理奪っても、それはただの暴力行為の一種……面白くも何ともないわ。それに一生に一度しかないハイライトだもの、もっと劇的なシチュエーションを用意してあげないとねぇ……♥」

不穏なセリフでほくそ笑みつつ、おもむろにオブシディアは一旦引いたチンポの代わりに、水色と白のミニスカートの上から、スターティアの下腹部に手のひらを近付けた。

「そう、嫌悪感や苦痛は我慢できる……でもまったく逆のもの——快楽ならどうかしらぁ？　それも……あなたのまるで知らない快楽、よ♥」

「なっ……何、を……ッ、あうぅッ⁉」

キィィィン——と、女幹部の額の黒曜石が怪しげな音と暗い光を放ち始めた次の瞬間、ドクン……と体の内側から不気味な鼓動が響き、みずからに起きた異変に狼狽するスターティア。

「そうそう、言ってなかったわねぇ……あなたにさっきたっぷり飲ませた私の精液には、無数の微小なバイオ改造ナノマシンが混入されててねぇ？　こうやって外から指令を与えてやれば——すぐに完成するわよ、愉快な〝モノ〟が……ね♥」

「そっ、そんなものをあたしのカラダにッ……⁉　い、一体何をするつもり……んうぅっ、あぐぅぅぅッッ⁉」

今まさに、シャドーマテリアルの異次元科学によって自分の肉体が造り替えられている――そのおぞましい事実と、どんどん強くなる体内からの熱い鼓動に、スターティアは青ざめた顔で震えながらホテルの床にうずくまる。

そして……少女のカラダに、信じがたい淫らな変化が訪れた。

「えッ、なっ……何これっ、内側から膨らんで、なっ何かが……で、出てきちゃ……ううううううッッッ!!?」

にゅずっ――ずずっ、ずむるんっっ……♥　ずろんッッ!!

「い、嫌ぁぁぁぁッッッ!!?　あたしの体にお……おちんちんが……ッ!?」

そう、飾り気のない純白無地の清楚なショーツからたちまちハミ出し、衝撃でめくれて花びらのように広がったスカートの中央に、文字通りおしべのようにぴょこんと突き出したモノは――まぎれもない男性の生殖器、ふたなりの象徴だった。

「あらあら、これはまた結構ぶっといのが生えたわねぇ♥　おチンチンなんて可愛いもんじゃないでしょう？　おチンポだわ、下品なオスちんぽ♥」

クリトリスのある位置のすぐ上から生えたそれは、同い年の男子学生の平均より、長さも太さもやや大きめだろうか？　生えたばかりなせいか肉幹の色はまだ白っぽく、仮性包茎の先端からピンクの亀頭がのぞいている。そして心臓の鼓動に合わせ、びくん……びく

んとかすかに脈打ち、熱を帯びて震えていた。
　できの悪いコラージュ画像のような、清楚で凛とした美少女戦姫の体にまるで似つかわしくないグロテスクな部位――だが両者は紛れもなく、直接肉で繋がってしまっているのだ。
「はぁい、女の子なのにキモいの生やしたふたなりおチンポ剣姫ちゃんのできあがり～♥そうよぉ、あなたはこれからメスの快感よりも先にオスの快楽を知るあさましいド変態になっちゃうの……♥」
「そっそんなッ、やだやだあぁぁっ!?　取って、取ってよこれぇぇっ!!　う、嘘よこんなっ……んぁぁうぅっ!!?」
　混乱と羞恥と屈辱と恐怖が一緒くたに襲い掛かり、さすがにパニックになりかかったスターティアを、文字通り未知の感覚が襲った。オブシディアの黒いレザー手袋に包まれた長い指が、だしぬけに正面から生えたてのフタナリペニスをキュッと握ったのだ。
「いっ、あうぅッ!?　は、離しッ……ひぅッッ!?」
「うふふっ、さすがに生えてすぐは痛痒さの方が先にくるみたいねぇ？」
　神経の束を直接掴まれるようなダイレクトな感覚に、スターティアは腰を引いて逃げることもできずかすれた声をもらす。彼女にはまだ、それを快感と認識するだけの余裕はな

い――それに気付いたオブシディアは、新たなカードを切った。
「さて……一つ賭けをしましょうか、スターティア」
「賭、け、ですって……っ⁉」
「そう。これからそのおチンポからの射精……精液のお漏らしを、三分間ガマンできたらあなたの勝ち――シャドーマテリアル七冥塊の誇りにかけて、人質にとったあなたのお友達は解放すると約束するわ」
『七冥塊の誇りにかけて』それは彼女らシャドーマテリアル幹部が、誓いを口にする時の言い回しだ。卑怯、卑劣を地でいくオブシディアですら、この言葉に続けて嘘を言ったことだけは一度もなかったのだ。
「本気で……言ってるのね……⁉」
「ええ、そうよ。せっかくの余興だもの、本気で面白くしてあげるの。しかもハンデとして、私は手――この十本の指でしかソレに触れないわ、どう？　……ああそれとも、せっかくこんなチャンスをぶら下げられても挑む自信すらないのかしら？」
　チャンス。確かにこれは裕美香を救う千載一遇の機会に違いない。オブシディアは優位に溺れるあまり、愚かな提案をしてきたのだ……それはこの状況下で、初めて見えた突破口に思えた。

ありえない異形のモノを生やされ淫らで滑稽な姿に貶められた美少女は、それでも再び戦士の瞳となって陵辱者を見上げ、まっすぐに決意を口にする。
「後悔するわよ、オブシディア！　たった三分間くらい、絶対に耐えてみせるっ……そして裕美香を救ってみせるわ、必ず！」
未知の器官と未知の感覚……とはいえそれが生理的なものにすぎないなら、意志の力で耐え抜くことはできるはず、ましてや手の刺激のみ――そうスターティアは結論付けた。事実、さっきその器官から伝わってきたのは痛痒さと不快さだけ。
第一、友を救うためなら自分はこれまでどんな困難も乗り越えて来れた……その自信が、生やされた醜い魔根のおぞましさすら一瞬忘れさせ、正義の美少女戦姫の闘志を炎と燃やしたのである。
「フフッ、それでこそ私たちの宿敵、正義の聖光剣姫さまね♥　じゃあ逆に、あなたがこの勝負に負けた場合のことだけど……そうね、その内容はこの紙に書いて伏せておくとしましょうか。あとのお楽しみよ」
「……なんでも構わないわ。どうせ裕美香がそっちにいる限りあなたの命令を聞くしかないんだし、第一負ける気なんてこれっぽっちもないもの」
それは頼もしいわねぇ……と笑みを浮かべつつ、ベッド脇のメモ用紙に手をかざしてそ

の裏側に何事かを書き込むオブシディア。
そう、すべては計算通り――今にも大声で笑い出したくなる胸の内を押し隠しながら、悪の女幹部はヒロインの陵辱劇を新たなるステージへと進めるのだった……。

＊　＊　＊

（うぅっ……こ、今度はまたこんな恥ずかしい格好を……ッ！）
ピンクのベッドに腰かけさせられ、はしたなく股を開いて、その間に片膝をついたオブシディアの眼前にショーツからハミ出たままの男性器を突きつけているという倒錯的な状況に、スターティアの頬がうっすら羞恥に染まる。
さっきと逆、悪の幹部が正義のヒロインにまるで奉仕するかのような構図だ。
「さて、と♥　じゃあはじめましょうか、スターティア。これからきっかり三分以内にあなたを射精させられれば私の勝ち、我慢できればあなたの勝ちよ」
ベッド脇のデジタル時計がちょうど18：00に変わったのを合図に、淫らなゲームは始まった。まずオブシディアは銀髪を揺らし唇を寄せて、力なく萎えている生えたてペニスに……ふっ、と息を吹きかけた。
「……っ、あ……うっ……!?」
ぞわっ――と背筋を這い上る奇妙な感覚。予想外の襲撃に、少女の金髪と肉茎が同時に

ぶるっと震えた。蠱惑的な黒いルージュがペニスから数cmの距離でぐるりと位置を変えながら、なおもその全周囲に長い息を吹きかけ続ける。

（な、なにこの感覚ッ……!?　カユいような変な……っそ、それに皮に包まれてない先の部分が、特に刺激が強くなってるっ……で、でもこのくらいなら耐えられ――）

ぴくっ……ぴくんっ♥　と、女幹部の熱い吐息に反応してわずかに膨張しつつある童貞男性器の異感覚を、まだ何が起こりつつあるか把握できないスターティア。その見通しは、あまりにも甘かった。

「ふふっ、ちゃあんと感じられるようになってるみたいね。じゃあいよいよ愛撫のはじまり……よ♥」

「え――っ、っっんぉッッ!?」

しゅこっ……とひとシゴき。ほんのひとシゴきオブシディアが少女の男根を黒レザーの指で握りコスりあげた。ただそれだけで妙な声が勝手に漏れ、背筋がぴんと反り、ぐぐっ……♥　と掴まれたモノは硬さ太さ長さを一度に増したのだ。

（え、な、何これっ……なんで、いま勝手に声が漏れッ……!?）

――しゅこっ、にゅこっ……しゅりゅっ、りゅここっっ……♥

「んあッ、ぉんあうぅっっ!?　え、なッ……やだ、これッ……んっあ♥」

たおやかな指に皮と肉を摩擦され、シゴきたてられる――ただ単純なその動きが、脳の快楽神経を直接鷲掴みにされているような暴力的快感となって、ウブなお嬢様の全身を甘く揺さぶった。しかも1ストロークごとにどんどん血が流れ込み張り詰めていく海綿体は、その肥大化に比例して快感伝達度を何倍にも増していくのだ。

「うふふ、腰逃げたりなんかしちゃダメよぉ……ほぉら、ビンビンにフル勃起してきたわよスターティアの仮性包茎おチンポ♥　憎い敵の手でコキコキされて簡単に快楽貪っちゃう節操なしフタナリちんぽにすぎなかったわねえ、あ～あ♥」

一直線に伸びた裏スジを、早くも女泣かせのエラを形成しつつあるカリ首を、巨木の幹にも似た根元を、皮越しでも突っ張っていることがわかる亀頭を……時に痛みに変わる寸前の強さでシゴき、時に優しく撫でさすり、なだめてあやす千変万化の黒い指技。

それはさっきスターティアがやらされた稚拙な奉仕とは比較にならない、百戦錬磨の男でもうめきを漏らす魔性のテクニックだった。オスの快感自体を初めて味わう彼女に抗えるはずもなく、オモチャのように性感を昂らされていくがままだ。

（なっ何これえッ……さ、さっきはキモチ悪いだけだったのにっ、全然違っ……！）

慌てて時計を見る――なんと18：00のまま、まだ一分も経ってない！　天井知らずに高まり続けるおぞましい快感、スターティアの脳裏に恐怖にも似た予感が走る。

「いきなり結構イイキモチになっちゃってるみたいだけど、ここからが本番よぉ？　さぁどんどん刻んであげるわ、あなたの生えたて弱々おチンポに、容赦ない未体験快楽の味をねっ♥」

今や痛いくらい反り返り、亀頭を半分ほど包んだ皮の上からでもうっすらエラの段差がわかるほどになった童貞ちんぽ……それを握ったオブシディアのコスチュームについた黒曜石が光を放つと、手袋からにじみ出るように透明の高粘度液――ローションに似た液体が出現し、その冷たい違和感に少女剣姫は細い悲鳴をあげる。

――にゅちっ、にゅるこっ♥　にゅるるっ、ちゅここっっ♥

「ッひうぅっっ⁉　んぉ、あおっ♥　ちょ、ちょっと待っ……はおぉっ♥」

潤滑液を用いてのヌルヌル摩擦……格段に直接的で強烈な快感の到来。『もうこれ以上は気持ちよくならないだろう』というラインが、ひとコキごとにあっさり更新してどこまでも上昇していく事実に恐怖すら覚え、スターティアは今や犬のように無様に舌を突き出し、唾液を滴らせて情けない声を漏らしていた。

「あらあら、もう泣き言を口にしちゃうのぉ～？　ちょっとぉ、まだようやく一分ってところよぉ？　さっきの大口はどうしたのよチンポ剣姫ちゃん、ほらほらほらぁ♥」

ただ単純なシゴき運動ではなく、はずみをつけてしならせ、左右や上下、あるいは斜め

に振り回すように童貞美少女肉棒を弄ぶオブシディア。指で作った狭いヌメヌメ輪っかにスコスコと密着ちんぽを潜らせ、根元から皮に包まれたカリ首までを甘くキュッキュと締め付けながらの愛撫コキ連打に、未精通の童貞処女が耐えられるはずもない。

「ひっいひぃぃっっ♥　んぎっ、んぉぉお♥　うそうそ嘘うそぉぉぉっっ、こっこんなの知らないぃぃっっ♥　こんなのって、こんなのってぇぇぇっっ⁉♥」

「ビン勃ちおちんぽガンシコされるのってたまらなくキモチイイでしょう？　おっぱいやおまんこやクリトリスの快感より先に、あなたはおチンポでのオス快楽を覚えちゃってるのよ今まさに♥　あ～あ、もう普通の女の子には戻れなくなっちゃうわねぇ……？」

苦痛でも嫌悪でもなく、背骨が溶けて脳に極甘シロップが広がっていくような多幸感、フワフワした浮遊快感。それはお嬢様育ちのヒロインが生まれて初めて体験する、一発で人格そのものをダメにするような麻薬的洗礼だった。

つるつるピンクの亀頭先端にじわぁっ……♥　と、涙のような先走りがにじむ。

「あら、あらあらあらぁ？　そんなに腰を突き出して……あなたひょっとして自分からチンポ動かしてないかしら？　スターティアったらエロいわねぇ♥」

「そっ……そんなわけないでしょ、うぅっ♥　あっあなたが動かしてっ、るんだわッ、んぉぉ……♥　あっあたしはただ耐えてっ……んへぁっ♥」

と、その瞬間。オブシディアの手がピタリと急停止した。
そしてスターティアは見てしまう――両手をシーツに突いて支えにし、ベッドの縁から突き出した腰を浮かせた自分が、一拍遅れてみずから指オナホールにチンポを突き込むのを……ぬちゅっ♥　と言い訳のしようがない音を鳴らしながら。
「え――う、ウソッ……こ、これは違ッ……♥」
「アッハハハハッハ、ち・が・わ・ないでしょぉぉぉっ⁉」
ずちゅっ、ぬっちゅちゅっっ♥　にゅこちゅこっ、りゅっくりゅっぷっ♥
「おっ♥　ひぃぃぃっっ、おひゃぃぃぃぃッッ⁉♥♥」
「ダメだの耐えるだの清純そうにほざいておきながら自分から腰振って敵の手でチンポ快感貪ってちゃ世話ないわよ、このお猿さんっ♥　ほらほらエラを指がぬるンッて抜ける時の刺激が大好きみたいねぇっ、これが欲しかったのかしらぁ⁉」
「違っんぉぉひぃぃっっ♥　ふっふぇぁ、こんなの欲しくなんかッ……キモチよくなんかっ♥　あんぁああッッ⁉♥」
もうとっくにさっきから、肉幹の根元のさらに奥からこみ上げてくる〝波〟があった。それに身を任せてしまったらどうなるかは想像に難くない……シーツに爪を立て、全身に脂汗をじっとり浮かせて、トイレを我慢する時のようにひたすら決定的決壊を先延ばしに

するのが、童貞少女に唯一できる抵抗だった。
時計表示は18：01、いまだ半分もすぎていないかもしれないのに！
（さぁて……このまま本気でヤれば十秒以内に発射ってとこだけど……せっかくだからもっと恥ずかしいイキ方で心をバキバキに折ってあげないとねぇ……♥　そのためにまずは、ニセの希望を鼻先にニンジンみたくぶら下げてあげるわぁ♥）
オブシディアのコスチュームから黒曜石が離れて宙に浮き、再びあの立体映像……囚われた裕美香の姿を投影した。おとなしそうな印象の少女は気を失っているようで、縛られた柱に制服姿でもたれ、白く形のよいあごに黒髪が一房はらりとかかっている。
「ゆっ……裕美、香ぁっ……！」
「そうよ、愛しのユミカちゃんよ♥　あなたがこのまま精液お漏らししちゃったら、大切なお友達を助けるせっかくのチャンスがパァになっちゃうの、わかってるわよねぇ？」
守るべきものの姿をはっきり見せられたことが、いつも戦いの中でそうだったように、悪の猛攻に負けかけていたスターティアに理性と希望の灯火を再燃させる――それすらも女幹部の計算のうちと知るはずもなく。
「っく、くぅッ……！　そ、そうよ……あたしは裕美香を助けるッ、そう誓った……っ！だからこんなモノに、絶対に負けたりはしないのよッ……！」

その苦しそうな声からは、さっきまでの甘い響きが消えている。汗のじっとり浮いた顔をオブシディアに向け、全身にグッと力を入れて、クチュクチュと弱点をシゴかれながらもなお、反抗の闘志を取り戻した顔をキッと向ける少女戦姫。

（そうだ時計！　……18：02になってる、いける……わ！　このままあと60秒未満、耐えられないはずなんて……ないッ！）

「そう……敵ながら見事な闘志ね、それでこそスターティア。じゃあ私も遠慮なく――手加減せずに思いきりシコッちゃっても、ぜんぜん大丈夫よねぇ？」

「……え？」

――手加減？

そう言ったのか？　何が？　……今までのが？　じゃあこれからのは……？

その意味を理解するより早く、スターティアの隣に腰かける位置に移動したオブシディアが、ローションに濡れた若肉茎を逆手できゅっ♥　とニギり直し――！

……にゅぢゅッッッ♥　ズっちゅぬっちゅッ、ちゅここっにゅこじゅこッッッ!!

「おッッ……♥　ぉっほッッ!?　え♥　やっやッッうっウソ嘘嘘嘘うそぉッッ!!?」

これまでとは次元を異にする密着圧力とスピード、先端から根元までをひといきにぬちっぬちっぬちッッ♥　と往復する変幻自在のストローク。そして左手の五指を亀頭にかぶ

せ、すりこぎでも使うようにコネ回す連携攻撃……それは今までの愛撫など児戯に等しい、精液を無理矢理搾り取るための無慈悲な搾精運動。

「ひゃんぁぁあッッ⁉　がっ♥　ガマンしなきゃいけないのにぃぃぃッッッ♥　とっ止めてえぇぇぇッッ♥　これ無理無理むりむりぃぃィィッッ♥　おひッいひぃぃっっっ♥♥」

「あっははははッ‼　案の定ちょっと本気出しただけで泣き言吐いたわね聖光剣姫サマ♥　なぁにが『絶対に負けたりはしないのよ！（キリッ）』よ、なぁんにも知らない処女で童貞のクセに笑わせるわクソエロガキ！　さあ死ぬほど下品な精通させてやるから覚悟しなさいっ、ほらほらほらほらァッ♥」

もはや全神経を射精我慢に集約させなければ０・１秒ともたないスターティアの肢体を、オブシディアは額の黒曜石から放つ念動波――普段なら抵抗できるはずの力によって操り、下品なガニ股開き中腰ポーズを無理矢理とらせる。むろん両手は頭の後ろで組ませ、ヘコヘコと腰を前後に振らせるヒロインにあるまじき屈辱姿勢だ。

だが、少女の初射精を貶めるための悪魔的発想はそれだけでは終わらなかった。

宙に浮かぶ宝石から投影されたままの裕美香の映像に、突如として奇妙な物体が出現したのだ――それはまるで、空中から生える男性器の先端のような……⁉

「うッ嘘っ……あれって、あれってまさかぁぁあッッ♥」

「そうよ、お友達が気になるみたいだから部分空間転移でおチンポ先だけあっちに行かせてあげたわ♥　さあ、優しい言葉でも――カケてあげなさいなッ!!」

絶望的な宣告と共に、闇色の空間にその先を突っ込んだようになった射精寸前ふたなりチンポを根元から上へ、にゅこにゅこりゅこりゅこぉぉっっ♥　とラストの追い込みをかける悪魔の指。

「いッイヤぁぁぁっっ!?　こっこのままじゃっ♥　ゆっ裕美香にかかっちゃうぅッッ、起きて裕美香逃げてお願い逃げてぇっ、あひぃぃぃっっ!?♥」

「泣いても叫んでも聞こえないわよムダムダぁ♥　親友に初搾り臭ザーメンブッかけるのがイヤならあんたが射精ガマンすりゃいいだけでしょうがっ♥　あとたった十秒程度なんだから根性見せなさいよぉッ！♥」

親友のため、正義の勝利のため、そして少女としての尊厳のため、全身全霊をかけて射精を押さえ込もうとする少女剣姫――だが、いつものような奇跡の逆転劇は起こらなかった。オスの生理現象と下賤な衝動の前に、ついに彼女の肉体はその高潔な精神を裏切ったのだ。

「ぁふっ、んほっ♥　んぉぉ……んほぉぉぉおッッ♥　のっ昇って♥　何か昇ってくるぅぅっっ♥　おチンポからッ……ぃっっ♥　んひっほぉぉぉおおおおッッッ♥♥」

「あらイクのね？　憎い敵の女の手で、大切な親友めがけてくっさい童貞精通液びゅばびゅばブチまけ初どっぴゅん♥　しちゃうのね⁉　いいわよ出しなさいッ♥　しっかり見てあげるからッ、正義の美少女戦士のプライドも女の子の尊厳もぜんぶぜんぶなくして死ぬほど情けなくて恥ずかしくて気持ちいい射精しちゃいなさいスターティアッ‼」

……びゅちぴッッ‼　ばびゅちぃぃぃっっっ♥♥

「――ごゃあぁッッ♥♥♥」

精通の瞬間、もはや声も音もスターティアには聞こえていなかった。絶望的状況も裕美香の安否さえ脳裏から消し飛び、形成されたばかりの尿道内を熱いゼリーが通り抜ける痛いほどの快感と、絶対的解放感だけが少女のすべてを支配していた。

びゅぶぷっ、びょぴぴぃぃっ♥　どびょるるぅぅっ、どくっぴゅ……ぷぴぃっ♥

「おっおひィィッ♥　んぉぉっほ、ほへぇぇッ♥　ひっひゃほっ♥　あぁおぉ……んお、おおお……ッ♥」

「あっはっはっはっは‼　何よその声、発情期のネコみたいっ！　射精ぶちまけ音もすっごい下品よあなた、私の宝石の機能でしっかり録画録音してあげてるから安心しなさいな♥　ほらほらヒリ出しながらしっかり見なさい、あなたの排泄してるスケベ汁でお友達がどんな目に遭ってるかをねぇ‼」

強烈極まる初めての射精感覚につま先をピンと突っ張らせ、全身を総毛立たせガクピク震わせながらも、見開かれた少女の瞳は立体映像に吸い寄せられていた。

破裂しそうなほど張った筒先から、びゅるんびゅるんと放たれ続ける白いマヨネーズのようなオスの汚液が、眠る裕美香のつややかな黒髪や形のよい眉、ぷにっと柔らかそうな頬、眼鏡、紺色のブレザーや白いブラウス、校章やリボンにまで次々と襲い掛かり、穢(けが)しつくす光景を――その陵辱者が他ならぬ自分であるという絶望を。

「あ～らあら、えぐいブッカケられ方されちゃってかわいそぉ♥　まるで変質者に襲われた被害者ねぇ♥　わかってると思うけど私たちは指一本陵辱の手を触れてないわよ、スターティア……あの娘を、罪のない一般人を、大切な親友を――今ぐっちょぐちょに初ぶっかけキメて汚してるのは他でもないあ・な・た♥　なのよ♥」

「んおぉ、ぉ……♥　ゆっ……裕美、香ぁぁ……♥　ごめ……んっ、ごめんなさいぃぃ……がまん、できにゃくてぇ……せーえき、出しちゃってごめんにゃさひぃぃ……っ♥」

悲痛な謝罪の言葉と裏腹に、正義の美少女戦姫は上体をのけぞらせヨダレまで垂らして、ガニ股腰をカクカクと前後に振りたてるお下品ダンスに無意識に酔いしれ続ける。

宿敵の指をオナホ代わりに搾り出される元気いっぱいぷりぷりのフタナリ濃厚初搾りミルク……ようやく勢いをやや減じたそれは、親友の着る学校指定のブラウンチェックのプ

リーツスカートにパタパタとひっかけられ湯気と異臭をたてていた。
「初めてにしては豪快な噴射っぷりだったわよぉ、チンポ剣姫ちゃん♥　さて、勝敗は決まったみたいだから、紙の指示に従ってもらうとしましょうかしら……ふふっ、その処女ボディにしっかり教え込んであげるわよぉ、まだまだこんなもんじゃないフタナリ快楽地獄で、どんどんダメになっていく気持ちよさをねぇ……♥」
　あまりにも甘美な敗北の余韻に、ぴゅるぅっ♥　と最後のひとしぼりを力なく噴き出し、ぜぇはぁと荒い呼吸を吐きながら、スターティアはその呪縛のような宣告をただ受け止めていた。
　そう、あの最後の瞬間――生まれて初めての精液を吐き出した直後に、無情にも時計が一拍遅れて18：03を指す光景だけは、しっかりと瞳に焼き付いていたのだから……。

第16話　女怪人乱舞！　早漏チンポに叩き込まれるドスケベ快楽責め！

「ひっひぎっっ♥　あぐっ、うあぁぁあっっ!!?　さ、触るなぁぁあっっ!!♥」

にゅく♥　にゅこ♥　にゅくっ♥　くにゅくにゅんっっ♥

淫らでたおやかな女幹部の指が、敏感な生えたてチンチンを弄ぶ。

「あっははははっ♥　ホラホラちょっとはガマンしてみせなさいよアンタ、スターティア以上の早漏クソザコちんぽにもほどがあるわぁ♥」

肉触手で拘束宙吊り状態のシルヴァリアを、背後からずっぷりと生ハメで犯しながら、オブシディアはそのフタナリ皮かむりペニスをオモチャにしていた。

過敏な神経まみれの刺激に弱い器官を、痴女の指先に容赦なくイジくられる暴力的刺激に、生えたて童貞肉茎が耐えられるはずもない。

「うっうぐぅぅぅっっっ♥♥　い、嫌だ嫌だッッ、きっ貴様の手で好き勝手にされるなどとぉぉっっ!?♥　おっおうぅぅっっ!?♥」

「ほぉ～ら、諦めてさっさとブザマ精通キメときなさぁい♥　我慢とかムダムダ、すぐにドピュドピュどっぴゅんこ♥　秒殺発射させちゃうわよぉぉっっ!!」

左手の指で作った輪っかで、根元をスコスコきゅっきゅ♥
右手はかぶせるように、余り皮たっぷりの亀頭をグリグリぐりゅりゅん♥
十本の淫らな指が織りなすチンポ殺しの魔快楽に、童貞勃起が耐えられるわけもない。
（こ、こいつの前で思い通りの不様な姿を晒すなどとッ……そ、それだけはぁッッ!! それだけはイヤだっ、イヤなのにぃぃぃっっ!!）
オスの刺激に集中させるために、マンコにハメたままの比べものにならないほどたくましい大人チンポは、ピストンせずにグングンッ♥ と反り返らせるだけだが、無防備な子宮口に快感振動をグリグリと流し込むのは忘れないオブシディア。
それらの複合した悪魔的な刺激に晒され、ザーメン蛇口を閉めることにすら慣れてないシルヴァリアの〝おチンチン〟はガマンのかいなく……たやすく決壊の時を迎えた。
「おっんおッ♥ おおふぅぅッッ!?♥♥ くっ来るぅぅっっ、なっ何かが肉の中を昇って……うっうあああぁぁぁぁっっ!?♥♥」
——ぶぴゅっっ♥ ぴゅくんっっ！
ぴゅくっ、とくとくんっっ♥ ぶぴぴっっ！♥
「あははっ♥ ずいぶんと可愛らしい射精音ねぇあなた、まさに精通って感じのお子ちゃま発射だわぁ♥」

「とっ止まらなっっ♥　なんでこんなッ……じ、自分の体なのに止められないのよぉお、おっっ!!?」

「おほっ……くぅぅっ♥　肉穴マンコも発射に合わせて生意気にぎちぎち締まってっ、なかなかいい具合よぉ、ガキのくせにっっ♥」

「こっ、こんなぁぁあっっ♥♥　んおぉぁぁ〜〜〜〜ッッ!?♥♥」

オブシディアの指の中で、精一杯反り返った男子中学生サイズの生っちろいペニスが、包茎余り皮の中にぴゅーぴゅーっ♥　と精液を吐き出した。

先っぽからダラダラと溢れ陵辱者の指を汚したそれを、ちゅるんっ♥　と女幹部の黒いルージュが飲み込んでテイスティングする。

「んふっ、青臭ぁい……♥　量はまだ少なめだけどネバっ気が濃くて、元気ぷりぷりの若々しいザー汁ねぇ、んぷぁっ♥」

「やあっ、やめろっ!?　あ、味わうなぁぁ……！」

自分がヒリ出した黄ばみ粘液を、妖女の赤い舌がチュルチュルとしゃぶりすする淫らな光景――無意識に反応した股間が再びじくじくと熱を持ち、シルヴァリアは自身の変化に愕然としてしまう。

「あ〜ら、またすぐにお勃起？♥　フフッ、喜んでちょうだぁい♥　あなたの早漏よわよ

わチンチンだけどぉ、回復性能だけはピカいちに調整しといてあげたわぁ♥」
「なっ!?　だ、誰がそんなことを喜ぶ!?　わ、私の体をどれだけ玩具にすれば気が済むっ――んひんっっ!?♥」
ぐぐんっっ!!　とグラインドした女幹部のむっちり腰が、たくましい極太チンポを支点に、貫かれたシルヴァリアの体を大きく揺さぶった。
ユサユサと、まるで馬の背に揺られるような前後運動……その結果、ねっとりした先走り汁を鈴口から垂らした半勃起ペニスが、空中でぶらんぶらんと前後に揺れ動く。
「ほぉら、ほぉらぁ♥　こういうのはどうかしらぁ？　あはっ、触ってもないのにビンビンにフルボッキおっき♥　してきたわねぇ？♥」
「ひっんひぃぃっっ!?　やっ止めっっ♥　とっ止めろぉぉっ!?♥　く、空気に触れてっ、ねっ根元を支点に振り回されっ……んおぉぉっっ!?♥♥」
ぶんぶん、ぶるんっ♥　と、スレンダーな女剣士に似つかわしくない豊かな巨乳と生えたてチンチンが宙に躍る。
風を切る感触と根元にかかる反動だけでどうしようもなくキモチよく、再びグツグツと昇ってきた精液が、ぴゅぴゅっ♥　ぷぴッ♥　と先走りのお漏らしを撒き散らすほどだ。
「あっはっは♥　こんなヤワな刺激だけでイキそうなのぉ？　生やしたての時のスターテ

ィアでさえもうちょっと頑張ったわよぉ、あんたって本当にザコい早漏おチンチンねぇ？」
「うっうるさいっっ、だっ黙れぇぇっ!?　こ、こんなおぞましい感覚になどっ……く、屈してなるものかぁぁっ！♥」
荒い息を吐きながら、背後の陵辱者をキッと睨むシルヴァリア。
だが一筋離れた美しい黒髪が上気した口元に汗で貼り付き、何ともなまめかしい表情になってしまっていることに本人は気付かない。
（いいわいいわぁ、その顔……見てるだけでゾクゾクしてどんどん孕ませミルク作れちゃいそ♥　スターティアともども堕ちるところまで堕としてやるから覚悟なさぁい……っ♥）
ねろぉり♥　とゲスな期待に黒い唇を舐め、でもその前にまずは……と、悪の女幹部は陵辱計画の段取りをめぐらせる。
「んふふ、口先だけは何ともご立派ねぇ……じゃあ、せっかくだからも～っとキモチいいイキ地獄を体験させてあげるわぁ、アリアちゃん♥　……さあおいでなさいな、お前たち！」
オブシディアが指を鳴らす。すると――。
「はぁ～い♥　お呼びがかかるのを待ちかねましたよぉ、オブ様ぁ♥」

「んふふ、あのシルヴァリア様とえっちできるなんて光栄です……♥」
「な……こ、こいつらはっ⁉」
部屋の奥から現れたのは、茶色のショートヘアと藍色のロングヘア、女子学生くらいの声と体格を持つ美少女二人。
だが、その外見は一見してわかるほど、人間のそれではなかった。
ショートヘアの娘は、背中や二の腕など体のあちこちに猫科動物を思わせるすべすべの毛皮を持ち、猫耳と尻尾、牙に似た八重歯を生やしたいたずらっぽい表情の持ち主。
そしてロングヘアのもう一人は、うっすら青みがかった肌と、爬虫類のような縦長の瞳孔を備えており、その舌はチロチロと蛇のように長く細く伸びて先が二股に分かれている。
そしてどちらも、ほとんどヒモ状の高露出下着にあられもないムッチリ裸身を包み、全身から発情したメスのフェロモンをむんむんと放っていた。
「そう、ご覧の通り女怪人……しかもこの娘たちは、私みずから改造と調教の限りを尽くして自分好みに変えた専用ハメ肉玩具どもなの♥」
「そうですよぉ、オブさまの素敵なおチンポ様のお世話が、あたしたちスケベ怪人のお仕事なんですぅ♥」
「んふふ……その中でも選りすぐりの二人のテクニック、その身でたっぷり味わってくだ

さいな……♥」

「な、なにを言って……！　く、怪人ふぜいがッ、私に触れるなッ!?」

欲望にギラついた目で舌舐めずりしつつ近付いてくる二人の女怪人……本来なら一撃で打ち倒せるはずの取るに足らない相手。

だが、今や身動き一つとれない状態で新たな弱点をさらけ出すシルヴァリアは、本能的な恐怖を覚えて白い裸身をぶるりと震わせた。

「あはっ、これがシルヴァリアさまの生えたておチンチンさんなんですねぇ♥　かっわいい～♥」

「すんすん……ああっ、青臭い初搾りスペルマのにおいでいっぱい……♥」

「うああっ!?　や、止めろ、にっにおいなど嗅ぐなぁっ!?」

目をハートマークにした女怪人たちが、突き出されたシルヴァリアの腰の正面に陣取る。

さっきブチ撒けた精通ザーメンが周りにこびりつき、包茎余り皮の中にも残ったままの汚れたフタナリペニスを、怪人美少女たちに至近距離で見つめられるという予想外の羞恥に白銀の魔剣士は焦る。

「じゅるっ……とても美味しそう、です♥　たっぷりと、繁殖欲いっぱいの精気が詰まっているのを感じます……♥」

「あぁん♥　も、もう構いませんよねぇオブ様ぁっ？　早くドスケベれろれろおチンチンあそびっ♥　し、したいですぅっ！♥」
「ふふっ、自分でしつけたとはいえまったくこらえ性のない淫乱ビッチどもねぇ……♥まあいいわ、壊さない程度にしゃぶりヌいてあげなさいな、そのザコちんちんをねぇ！♥」
「「はぁーいっ♥♥」」
れろんっっ♥　と、猫女怪人の可愛らしい口から突き出される、たっぷり肉厚のベロ。
ちゅろろんっ♥　と、蛇女怪人の薄い唇から出現する、粘液まみれの長大な細い舌。
それらが両サイドから卑猥に宙をのたくって、プルプル怯えて震える肉サオに近付き……！
「き、貴様らッ!?　い、一体何をっ……や、やめっ――んおぉぉぉうっっ!!?♥♥」
れろろぉっっ……ずろろっ、るろろろっろぉぉぉぉんっっっ♥♥
りゅぷぷぷぅぅっっ♥　ちゅるんっっ♥♥
「はぁい怖くないでちゅよぉ～♥　シルヴァリア様の汚ポコチンさん、お皮のナカまでキレイキレイしましょうねぇ♥」
「んひっひぃぃぃぃっっっっ!?　やっやめッッッ♥♥　そっそんな所をホジくるなぁぁぁっっ!?♥♥」

「フフッ、こいつらのチンポ狂いっぷりときたら、一度吸い付いたら離さないわよぉ……♥　私でも油断するとタマキン空っぽにされちゃいそうなくらいだから、覚悟することね♥」

かすかにザラリとした……だが本物の猫のようにささくれだったそれではなく、まるで細かいシリコンの突起を無数に並べたような快楽刺激を発生させる、猫女怪人の肉厚ベロ。

そして、ローションめいた粘液唾液にたっぷりまみれ、包皮と亀頭の間を器用にズルズルと侵入してくる、蛇女怪人の長い舌。

異なるダブル刺激が、こちょこちょ♥　ずりゅずりゅ♥　レロレロ♥　ぐりぐり♥　と、初フェラ体験にしては強烈すぎるハーモニーで童貞ペニスを責めるのだからひとたまりもない。

「おッおひっっ⁉♥♥　んひっひゃうぅぅうっっっ‼⁇♥♥　やっ止めっ、止めろぉぉぉっっ⁉♥♥」

「れろれろっっ♥　ずろろっ……れりゅんっっ♥　あら、シルヴァリアさまったら、ひょっとしてまたイキそうになってませんか？　くすっ……はやぁい♥」

「はむはむっ……こらこらぁ、お掃除の最中なんですからぁ、白いオシッコびゅー♥　しちゃ、めっ！　でしょお？♥」

くすくす笑いながら、シルヴァリアの情けない反応を小馬鹿にする女怪人たち。
七冥塊最強の魔剣士の、そして元シルヴァラント王族の誇りを最低の形で踏みにじられ、白皙の美貌にカァッと血が上る。
（わ……私がっ、この私がこんな屈辱をっ……ザコどもにいいように弄ばれ、なぶりものの晒しものにされるなどとぉ……ッ！）
だがこの状況では、さしもの彼女も抵抗のしようがなかった。
肉触手に拘束された太ももや両腕をカクカクとブザマに開閉させて身をよじり、黒髪を振り乱して気を散らし、ドスケベ極まるダブルおしゃぶりによる暴発を必死に先延ばしにするほかない。
「れろれりょりょっ……ぷはっ♥　へぇ～、今度は意外と頑張るんですねぇ、シルヴァリアさま偉い偉いっ♥　じゃあ……そろそろアレ、やってあげたらぁ？」
「ふふ……そうね、オブ様も褒めてくださる私の得意技を……♥」
猫娘怪人が身を退き、蛇娘怪人にペニスの真正面ポジションを明け渡す。
その口からひときわ長い舌がにょろりと先端めがけて伸び、シルヴァリアの脳裏に不吉な危険信号を鳴らした。
「ふふっ、今からナニされるかわからないってカオですねぇ♥　すぐに、イヤというほど

味わえますよぉ……♥」

「な……何を、するつもりだッ……!?」

手、いや口の空いた猫娘怪人が、シルヴァリアの耳元に唇を寄せて――囁く。

「……にょ・う・ど・う・ほ・じ・く・りっ♥」

「な――!?」

待て、ニョウドウとはなんだ……と女剣士が思わず声に出しそうになった、その瞬間。

んちゅぷぷっっ――れる、ずろろっ……みゅぐぐんッッッ♥♥

「ッお……えぁ!?　お、おおッ……んおッッひぎぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっっっ!!??♥♥」

細くねじられた長い蛇舌が、ぴっとりあてがわれた鈴口から早漏チンポの中へと……にゅぶにゅぶと先走りにまみれて侵入していく。

おぞましい圧迫感と、そして襲い来るそれ以上の被虐快感……あらゆる〝穴〟の感度を高められたシルヴァリアに、さっき処女を散らされながら味わわされた本来ありえないほどの魔快楽が再び襲い掛かった。

「んぉぉおぉぉおっ♥　おっおおぉおおおッッッ!!??♥♥　なっ何この感覚ぅぅぅっっ!?♥　くっ来るな来るな入って来るなぁぁっっ!?♥♥　ひっひぎぃぃぃっっ!?」

にゅぞ♥　にゅぶっ♥　ぶぷっ♥　ずにょろろぉ……っ♥

にゅっぷ♥　にゅぷぷっ♥　にょぷ、ぬぷぽっ♥　ぷちゅにゅむるんっっ♥

嬉しそうに上目遣いで、シルヴァリアの絶叫をサディスティックに見上げながら、ヌポヌポとリズミカルに、粘液まみれの蛇舌をチンチン排泄穴に出し入れする蛇娘怪人。

まるで、強制的に生み出されたもう一つの敏感処女マンコをハメ犯されているような……魔剣士の股間から背筋、脳天までを、ばちばちと絶望的快感の火花が爆ぜ貫く。

「どう？　すごいでしょうその子のドスケベ尿道舌ファックは♥　それもただホジくるだけじゃないわよぉ……そいつの舌が分泌する粘液があんたの射精穴を内側から造り替えて、感度をバッキバキに強化改造しちゃうんだから♥」

「うふふっ、お射精が死ぬほどヤバくなるのはもちろんっ、これからはオシッコするだけでものたうち回るくらいキモチよくなっちゃうんですよねぇ♥　あと、尿道の太さもどんどんユルユルに大変身っ♥　ぶっとくて男らしい精液がヒリ出せちゃいますよぉ、よかったですねっ♥」

女幹部と女怪人による外道な宣告が、ただでさえ脳細胞を削り溶かすような尿道姦の衝撃快楽に翻弄されているシルヴァリアをさらに打ちのめす。

（うっ嘘嘘ウソ嘘よぉぉっっ!!?　わ、私の体がそんな淫らに改造されてっ……こ、これ以上イヤらしく造り替えられるだなんてッッ……!?）

だが彼女には、そんな残酷な運命に思いを馳せる余裕すら与えられなかった。
ぬぽぽっ、ずぷぷぷぷうっ……♥　と奥の限界まで押し込められた蛇舌のうねりが、一瞬ぴたりと止まったかと思うと。
「あはっ♥　いよいよショータイムですねぇオブ様っ♥　一気に尿道からベロ引っこ抜かれちゃうトドメのし・げ・き……シルヴァリア様、耐えられると思いますぅ？」
「そうねぇ、私でもアレで射精ガマンするのは並大抵の苦労じゃないから……ま、なっさけなく瞬殺ドピュっちゃうのが関の山でしょうよ♥」
「な、なぁ……っ⁉　ぬ、抜く、だとっ……⁉　そ、それも一気にっ……⁉」
元々射精そのものの穴に〝栓〟として舌を押し込められているからこそ、かろうじて発射をまぬがれているような一触即発の状態なのだ。
これを一気に引き抜かれたりなどしたら――！
「あっ、でもでもっ♥　あたしはシルヴァリア様を信じてますよぉ、だって七冥塊いちの魔剣士！　その誇りにかけてきっと、お漏らし射精くらいガマンしてみせてくれるはずですっ♥　ねっ？♥」
（な……こ、こいつ何を勝手なッ、ことを……ッ‼　か、体さえ自由になるなら今すぐ殺してやりたいッ……‼）

再び蛇娘怪人の隣にしゃがみ、頑張れ頑張れふれーふれーっ♥　と目の前の爆発寸前ペニスめがけて無責任な笑顔で応援する猫娘怪人。ふざけるなと叫びたくてももはや口を開く余裕すらないシルヴァリア。

そして、にまぁ……♥　と上目遣いで笑う蛇娘怪人の長い舌が、ついに――！

にゅろぞぞぞぞぉぉ――じゅぞぞぞるぞぞんっっ♥♥

「おっおおおぉぉぉぉぉぉッッッ!?!?♥♥　ぬっヌケっ♥　抜けるぅぅぅぅぅッッッひぃいいいッッッ!!??♥♥」

んじゅるんっ……♥　ぬぬっ……ぽぉんっっ!!♥♥

「いいぃぃぃッッッ!?♥♥　あおぉぉんんんぉぉぉおっっ、うあぁぁぁあ嫌ぁぁっっ!?♥♥でっ出りゅぅぅぅっっっ、ひっ引っ張りだされりゅぅぅぅぅぅうううッッッ!!!♥♥」

ぶぴっ……どびゅぷぅぅっっっ!!♥♥　どくどくぅぅっっっ!!

どぴぴっ、びゅぷるんっっ♥♥　びょぽぉぉっっ、びゅちゃぁっっ!!♥♥

最後まで引き抜かれ、二股の舌先がちゅるりんっ♥　と宙に躍るのと、その後を追うように白い粘液が噴き出すのは、ほぼ同時だった。

宣告通り、早くも太くだらしなく改造されつつある尿道内を、煮詰まったうどん状ザー汁が一気に通り抜けヒリ出てゆく圧倒的放出感、解放感……！

「おおっ……♥♥　おッんうおおお……♥♥　んおぉぉおっほぉぉぉぉ……!!♥♥」
　ぶっぴ♥　ぶぴぴっ♥　とペニスがぴょこぴょこ脈打つたびに、シルヴァリアの理性はぶちぶち音を立てて千切れ、あさましい肉欲中枢に置き換わっていくかのようだった。
「あはぁっ♥　やんっ、シルヴァリア様のイカくっさいオスミルクっ♥　顔にネチャネチャぶっかかってるぅ♥」
「ああんっ……あぷぁっ♥　す、すごい量……っ♥　そんなに私の尿道ホジホジがお気持ちよかったんですか、光栄です……♥　毎日でもしてあげますよ♥」
　早漏包茎ペニスから射出されるものとは思えないほど、先の精通とは比較にならない量と太さで空中をのたくってドピュり舞う、白蛇めいた太ザーメン帯。
　ビクビク震えるチンチンの先でイヤらしく口を開けて待ち構えていた二人の女怪人の発情顔めがけてぶち当たり、たっぷりこってり降り注ぐ。
「あ〜ら、初ギメ顔射がダブルぶっかけなんて意外とドスケベねぇ、シルヴァリアったら♥　せっかくだからまんべんなくブチ汚せるように私がチンポ操縦桿でコントロールしてやるわぁ、ふんっ♥　ふんっっ♥」
「んぉおぉっっ!?♥♥　うっ動かすなぁぁぁっっ!!?　いいッッ今っそっちも刺激されたらっっ♥♥　んぎぃいっっ!?♥♥」

射精の脈動に合わせて不意打ち気味に女幹部が腰を叩き付けると、シルヴァリアの射精中ペニスがぶるんぶるんと暴れる。

それに合わせて上下左右に振り回される射精の軌跡が、猫と蛇の相を持つ女怪人たちの顔面といわず髪といわず乳といわず、下品にマーキングしていく。

どぷどぴっっ、べちょぉぉっっ♥　んびゅるるぅぅ……ねちゃぁぁぁっっ♥

「ふは……♥　シルヴァリア様のお出しになった生涯二発目のスペルマ、とっても臭くてこってりで素敵です……♥」

「ほんと、オブ様に負けないくらい濃ゆぅい♥　……でも、あ～あ残念っ、ガマン失敗！次はもっと頑張りましょうねっ♥」

「く、きっ、貴様らぁぁぁ……!!　んあぁぁあぐっ♥　こっ、腰を止めろっオブシディアぁぁっっ!?　んひぎっひぃぃっっ♥♥」

「おっほ♥　おほぉっ、そんなの無理よぉ♥　あんたのイキマンコが生意気に締め付けてくるからチンポピストン止まらないじゃなぁいっ♥　ふんふんフンッッ!!♥♥」

うっとりした表情をしながら、長い舌で飛び散った精液を集めネチョネチョとコネ回しつつその味を褒める蛇娘怪人。

よしよし♥　と小馬鹿にした態度に奇妙な母性を交えて、頭をなれなれしく撫でてくる

猫娘怪人。
バックから欲望まみれの腰ピストンでガツガツとマン肉をえぐってくるオブシディア。
そのすべてが、シルヴァリアの屈辱と羞恥を加速させることは言うまでもない。
「っくぅぅぅ〜〜〜っっ♥♥　締まるわ締まるわぁ、やっぱり精液ヒリ出し真っ最中のメスマンコの収縮ったら最高ねぇ♥　これだからフタナリ改造ドスケベファックはやめられないわぁ、ほらあんたたち！　もっとこいつのチンポ勃たせて、遠慮なく昇天させてやりなさぁいっ♥」
馬鹿な、そんなに連続して射精できるわけが――と、これまでの体感からそう叫ぼうとしたのも束の間。
「くくっ心配ないわぁ、改造がどんどん進んでる証拠に……ほぉらそろそろハミ出るわよぉ、醜い〝アレ〟が♥」
「なっ――こっ、これッこれはぁっっ⁉」
たぷんっ……どぷるんっっ♥♥
尿道ホジり責め射精の余韻にあえぐ包茎勃起と、オブシディアにバックからみっちり巨根をハメピストンされ限界まで広げった処女肉ビラの間――そこにみるみる膨らみ出現したのは、でっぷり太ったキンタマたち。

しかも貧相なペニスに反して、スターティアのそれよりも一回り大きく、こってり濃ゆい中年オヤジ臭すら放ち……オブシディアが言った通り強化された〝精液増産能力〟や〝連射能力〟を象徴するかのようだ。

「こっこれはっ……す、スターティアにもついていたあのっ……う、うあぁっ⁉　そ、そんなまたすぐにっ……⁉　たっ勃つぅっ♥　おっ勃ってしまうぅっっ⁉♥」

ある意味ペニス以上に、白銀の女剣士のすらりと流麗で無駄一つない肢体にふさわしからぬ醜悪なだらしない器官が蠢く。

とくとくんっ……ぎゅるるるぅぅ……♥　と、袋の中で脈動し渦巻く何かの感覚が、ゾクゾクと背筋を駆け上って、脳が勝手に勃起の指令を出してしまう。

「あはっ、素敵……です♥　それにタマタマの中から……さっきにも増してくっさい濃ゆ濃ゆザーメンのにおい、むわむわって感じますよ……♥」

「すっごぉい♥　こんなにすぐボッキできるなら早漏でもぜんぜん気にすることないですよぉ、シルヴァリアさますごいすごいっ♥　おりこうチンチンさん♥」

「ま、待てっ……や、止めろっ、そんなすぐに刺激されるなんてっ……⁉」

ぐっ、ぐぐっ……♥　と再び仰角をあげるイキたておチンチンめがけ、目を輝かせた女怪人たちの舌が、指が、無慈悲に殺到した。

「ではオブ様、ご命令通りすぐにこのザコチンを恥射精に追い込みますので……♥　れぇろれろれろ……れろれろりゅんっっ♥♥」
「あっガマンとかムダですからねー？　ほ～らヨワいとこほじくり♥　ほじくりっ♥　キンタマもナデナデさわさわっ♥　精液いっぱい作れるマッサージ～っ♥」
舐め、ねぶり、吸い、くすぐり、しゃぶり、甘噛(あまが)みし、ほじくる。
粘液まみれの蛇舌がチンチンに巻き付いてニュグニュグとシゴきあげると同時に、猫のベロが包皮と亀頭の隙間に侵入しぞりぞりとコスりあげ。
本気の女怪人たちの搾精コンビネーションが、パンパンに膨らんだ精液タンクに直結された早漏ペニスへと容赦なく襲い掛かる。
「ひぃぃぃッひぃぃぃぃッッ!!??♥♥　まッまたイカされるぅぅぅッッ!!♥♥　む、ムリヤリこんな怪人どもにィィィッッ!?♥♥」
絶叫と共に、下半身から再び怒濤のごとくわき上がる射精感。
拡張されつつある尿道では、さっきにも増して発射を先送りにすることすら不可能だった――ガマンできた時間は、せいぜい十数秒。
「あはぁっ、お漏らし発射準備完了ぉ♥　じゃあ今度はたっぷりプリプリ♥　口内射精しちゃってくださいねぇ――ぱくっ♥」

「あん……ずるい、独り占めなんて……じゃあ私は、おタマタマを可愛がることに……♥」

蛇娘怪人のぬめつく指で、ぶら下がったキンタマをモミモミされながら……にゅっぷりペニ先をくわえ込んだ猫娘怪人の唇がオナホールのように収縮して、シルヴァリア印の生ミルクをじゅぞぞぞっ♥　と貪欲に搾りあげていく。

たまらず、そのほっぺたの中でブリュブリュどきゅどきゅ♥　と響き始める、くぐもった下品な射精音。

「おおぉぉあぁぁあっっ!!?♥♥　すっ吸われっっ♥♥　ね、根こそぎ吸い出されりゅぅぅっっっっ!!??♥♥　ひぎッ、はっはひぃぃぃッッッ!!??♥♥　おおっ……んおぉぉおっ……お♥♥」

射出の脈動に合わせ、絶妙にちゅーちゅー♥　と口腔吸引でアシストされ、タマキンを精液増産マッサージされ……おかげで長く長く続く、人をダメにするドスケベ極まる放出感が、白銀の魔剣士のクールな美貌をだらしなく変えてしまう。

しかもドロドロに溶かされつつあるペニスのすぐ後ろから、オブシディアの大人巨根がメス穴をさっきからしつこくコネくり、かき回し、突き崩し――魔乳を揺らしてガッツンガッツン攻め立ててくるのだ。

「おおっおふぅぅっ!!♥♥　イイわよイイわよこの締めっぷり♥　ふんふんフンふんっ

っ!!♥♥　ほらほらぁっ、さっきまで処女だった生意気マンコを私のチンポ型ぴったりにしつけ変えてやるわぁぁっっ♥♥　さあなれッ、なるのよッ♥　私の都合のいいマンコオモチャになりなさいなぁぁッッ♥♥」

「だっ誰がぁぁぁッッ!!♥♥　だ、誰がそんなものに堕ちるものかぁぁぁっっ!!♥♥　わ、私は負けなッ……ま、負けなひぃぃぃっっっっ♥♥♥」

ドスドス♥♥　どきゅどきゅッッ♥♥　ばすんばすんっっ♥♥

シルヴァリアのすべすべしたヘソまわりに、亀頭のシルエットが内部から浮き出るほどの肉槍蹂躙……オブシディアはこうやって、獲物の下半身全体に一生忘れられない巨チンポの味を覚え込ませるのだ。

「あはぁっ♥　シルヴァリア様ったら羨ましいなぁ……オブ様の全開ピストンで、おマンコがっつり耕してもらえるなんてぇ♥」

「気絶するほど気持ちイイんですよね、あれ……♥　もうぜったいに他のチンポじゃ満足できなくなるって言うし……ああっ、見てるだけで濡れちゃうぅ……♥」

ドッと汗の浮いたむっちり尻をバックからがっつり抱え込み、床を思いっきりガニ股で踏みしめて繰り出される本気ピストン。

何人ものメスをむせび泣かせマジイキさせてきた極悪な腰使いに、今日初めてセックス

を経験したばかりの処女剣士が敵うはずもない。

「おっほぉ♥　今度はメスマンコが先にビクビクイキ痙攣し始めたわねぇ♥　さあッ、あんたが次に早漏ザー汁ドピュると同時に私もたぁっぷり追加子種をナマで注ぎ込んでやるからっっ、今度もせいぜい孕まず済むよう祈りなさぁいっっ‼♥♥」

「ふっふざっ♥　ふざけるなぁぁぁっっ⁉♥♥　もっもう射精するのもされるのも嫌ぁぁぁっっっ♥♥　来るなっ、止まれっ、止まってっ……おっおふぅぅぅっっ⁉♥♥　おっはへぇぇぇえぇぇぇ‼⁇♥♥♥」

チンポとマンコの快楽がもはや区別できないほどに溶け合い、混じり合い、ぎゅるぎゅると細い体の内を荒れ狂う。

心では嫌悪しているのに……体はオスの部分もメスの部分も、陵辱者たちの行為に激しく反応してむせび泣き、よがり狂う。全身の隅々までが快楽細胞に置き換わったような有り様だ。

（す、スターティア――スターティアっ、ゆっ優姫ぃっっ♥♥　わ、私に力を貸してっっ、こんなチンポなんかに負けないための力をぉぉっっ‼♥♥）

縦横無尽に突きほじくられる膣内粘膜が、亀頭でゴリゴリ押し上げられる子宮口が……そしてその奥の、大切な愛の営みの部屋が。

それらがオブシディアの、パワフルかつねっとりしつこい陵辱に適応しつつあるという実感に……メスとして媚びつつあるというおぞましい現実に、シルヴァリアは恐怖していた。

それゆえに、あの大切な笑顔の幻に彼女はすがる――だが。

「……ふんっっっ!!♥♥」

――ぼぐんっっ!!

オブシディア渾身のエグいチンポ突きが、シルヴァリアの子宮が楕円形にへこむほどに押し上げた……それがトドメとなった。

瞬間、脳裏に描かれた星ヶ丘優姫の笑顔はがらがらと砕け散り――！

「んッんおぉぉうぅぅっっ!?♥♥　ひぃぃんぉぉあぁぁぁあぁあぁあっっっ!!??♥♥♥　ぃぃぃぃイクいくイグぃッぐぅぅぅっっっ!!!♥♥♥」

「んおおおッッ来た来たきたブチ込むわぁぁぁっっ、抜かずの二発目ぇぇぇっっ♥♥蜂蜜みたいにネットリ濃ゆぅぅぅい孕ませ汁ぅぅ!!♥♥　極悪オタマジャクシ満載で叩き込むわよぉっ、その無防備な子宮で私の味をみっちり覚え込みなさいなぁッッ!!♥♥」

どびゅるるぅぅぅっっっ、どくどくんっっ!!　ごびゅっっ、ぶぢゅるるっっ♥♥

――と体の最奥で白濁爆発し、ドクドクと子宮に我が物顔で流し込まれるオブシディア

の悪の子種の火傷するような熱さ。

「あっはぁ♥　オブ様のたくましいおキンタマが、孕ませジュースどっくんどっくん送り込んでるぅ、いいなぁ～♥」

どぴゅぷんっっ、びゅぱぱっっ♥　びゅちぶぴぃぃっっ♥♥

――と意志に反して漏れ弾ける、四度目の射精がもたらす脳がぐずぐずに溶けるような暴力快感の熱。

「あっ……今度は私が吸い取る番♥　ちゅぷっ、んふぅっ……♥　ごくっ、こくんっ……♥」

おぞましい二つの快楽がシンクロし、シルヴァリアは身を焼くような屈辱と羞恥と無力感……そしてこれまでの常識が崩壊していく目眩にも似た転落の感覚に、ただ打ちのめされていた――。

＊　＊　＊

「ふぅぅっ……♥　っはぁ～、射精した、射精したわぁ……♥　ひさしぶりにキンタマ在庫汁が空っぽになりそうな勢いよぉ……んふーっふぅぅーっ♥」

ぬっぽぉ……んっ♥

すっかり充血したシルヴァリアのメス肉ビラから、さまざまな混合汁でマーブル模様に

汚れた半勃ち巨根がずろろっ……と抜け出た。
むりゅりゅっ……んぼぽっ♥　ぶりゅりゅんっっ……♥
続いて、ほとんどゲル状の塊になった白濁ゼリーが、だらしなく開いた割れ目からこぼれ落ち、女怪人たちが慌ててそれを舐め取り始める。
「ああんっ、勿体(もったい)なぁい♥　れろっ、ぺろぺろぉっ……♥」
「オブ様の偉大なザーメン様が、こんなに……やっぱり、羨ましいです……んちゅるるぅぅっ♥」
「こらお前たち、ちょっとくらいならいいケドしっかりバイブか何かで栓をしておくのよ？　そいつには言った通り、私の子種を孕むかもしれない恐怖をみっちり叩き込んでやらないといけないんだから……♥」
今やシルヴァリアは肉触手に四肢を吊されたまま、ただ荒い息を吐くだけでぴくりとも動かない。
よく見れば、本来無駄な脂肪なく引き締まっているはずの白いお腹が、ぽっこりと膨らむほどになっている……オブシディアに詰め込まれたフタナリ精液の洗礼だ。
しかもその尻には――何かの回数を示すとおぼしき五本一組の棒線が、左の尻たぶに十四本、右に十一本、いつの間にか書き殴られていた。

「はぁ……♥　それにしても、一度も抜かずに十四発もおドピュり連射なさるなんて……相変わらずお強くて素敵です、本気のオブシディア様……♥」

「でもシルヴァリア様もすごいですよぉ♥　いくら改造キンタマがあっても十一回も連続で噴きまくっちゃうなんてなかなかできないですよぉ♥　最後の方は結構、ガマンできてましたしぃ？」

またも小馬鹿にしたような女怪人の言い草。

だが当のシルヴァリアは、全身を弛緩させて肉触手に吊られ、無言で下を向いたまま……まさに息も絶え絶えといった有り様。

「さぁて、とりあえず今日はこんな所かしらね。それじゃあシャワーでも浴びてくるわぁ、アリアちゃんもちゃあんと休んでリフレッシュしときなさいよぉ……なにしろあんたのフタナリ調教は始まったばかりなんだものねぇ、あっはははっ♥」

性臭に満ちた部屋の後始末を女怪人たちに任せ、嘲笑う声を残して消えるオブシディア。

それを待っていたかのように……死んだように動かなかったシルヴァリアの頭が、かすかにぴくりと上を向いた。

（私は……私は決して、オブシディアなどには屈しない……！）

垂れ下がった黒髪の間からのぞく魔剣士の瞳は、死んではいなかった。

（奴は私を侮っている……！　その油断を、慢心を突いて必ず……逆転の契機を掴んでみせるッ！　スターティアの、優姫のためにも……ッ！）

体を汚しつくされた自分だからこそ、できることがあるはずだという覚悟。

オブシディアがもたらす白濁快楽に溺れつつも、シルヴァリアのプライドの芯はまだ折れていない――。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌！
妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌！
正義感に燃える少女達をたっぷり陵辱！ヒロインのピンチ満載!!
【偶数月】隔月発売
2・4・6・8・10・12月
【奇数月】隔月発売
1・3・5・7・9・11月
【電子版】毎月配信
書籍版は奇数月発売！
二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE
コミックUNREAL
アンリアル
正義のヒロイン 姦獄ファイル
あなたのキモチイイをお手伝い！キルタイムのアダルトコミック誌
電子書籍版も好評発売中
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中！
KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208
▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:(03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索